



TITLE:

魏博と成徳：河朔三鎮の權力構造についての再検討

AUTHOR(S):

渡邊, 孝

CITATION:

渡邊, 孝. 魏博と成徳：河朔三鎮の權力構造についての再検討. 東洋史研究 1995, 54(2): 236-279

ISSUE DATE:

1995-09-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/154521>

RIGHT:

魏博と成徳

——河朔三鎮の權力構造についての再検討——

渡 邊 孝

はじめに

I 「牙軍」再考

II 成徳軍藩鎮における軍構成と權力構造の特質

(1) 魏博・成徳兩藩の成立の事情と軍構成の特質

(2) 成徳軍における藩帥交替と權力構造の特質

(3) 所謂「三軍推立」と成徳軍における「兵」について

III 常山の秋——王氏成徳軍支配の終焉——

おわりに

はじめに

魏博・成徳・盧龍（范陽）の三節度使は、河朔三鎮と總稱され、いずれも安史の亂末期に唐朝に歸順した安史の舊將が節鉞を安堵されてより、「吏を擅署し、賦税を以て自私し、廷に朝獻せず。戰國に效ひて肱髀相依り、土地を以て子孫に傳へ、…唐亡ぶに迄るまで百餘年、卒に王土と爲らず」（『新唐書』二二〇 藩鎮魏博傳）と稱される如き、半獨立體制（所謂「河朔の舊事」）を維持した雄藩として、唐末の史上に名高い存在である。唐末・五代とは、こうした河朔三鎮をはじめと

する藩鎮が、政治・經濟・社會の全般に巨大な影響力を及ぼした時代に他ならない。それ故、藩鎮の軍事・民政・財政に關する諸制度、唐朝中央政權と藩鎮の關係、藩鎮内部の權力構造や藩鎮權力と在地勢力との關わり等々、藩鎮に關しては、これまでに様々な側面から多くの研究が積み重ねられて來た。⁽¹⁾就中、堀敏一氏による一連の研究は、藩鎮權力集團の構造的特質と、藩鎮權力と在地勢力の關わりに焦點を當て、「唐宋變革」の中における藩鎮體制の歴史的位置づけを旨とした、緻密な實證と明哲な論理構造を併せもつ秀れた成果であるといえる。河朔三鎮の權力構造について、堀氏と全く異なる理解を提示する谷川道雄氏にしても、堀氏の所説を正面から受けとめ、これを乗り越えた地點に新たな河朔三鎮像を模索する如くである。⁽³⁾

しかしながら、堀氏の論に對しては、藩制の地域的差異を捨象して全國の藩鎮を一律に扱っているという、大澤正昭氏の批判がある。⁽⁴⁾なるほど河朔三鎮の如く自立跋扈を逞しくした「反側」の藩鎮と、ほぼ完全に唐朝の官僚制的統制の下に組み入れられていた「順地」の藩鎮とでは、様々な點で異質であつたと考えられ、この指摘は肯綮に中と思われる。しかし、こうした地域的差異を踏まえて藩鎮の類型化を行った大澤氏や張國剛氏にしても、河朔三鎮については、これを同一の類型として取り扱っており、この點は三鎮をほぼ同一の權力構造をもつものとして考察を進める谷川氏も同様である。河朔三鎮を同一の類型において把握することは、一見當然の如くである。また、ある程度の差異を捨象した歴史事象の類型化・理論化は必要でもあろう。しかし、そこには絶えざる實證的檢證と吟味が加えられねばならないことも無論である。既に松井秀一氏は、三鎮のうち北邊に位置した幽州盧龍軍藩鎮について、その特異性を指摘し、魏博との軍構成上の差異についても言及している。⁽⁸⁾一體に從來の河朔三鎮論においては、魏博の牙軍を基準とする權力構造のモデルが、そのまま他の二鎮に無前提に敷衍される傾向が強いようである。小稿の目的は、河朔三鎮のうち魏博と成徳をとりあげ、兩鎮における權力構造の實相をあらためて探求することにより、兩者の間にはかなりの差異が存したことを明らかにすることにある。

I 「牙軍」再考

從來の研究においては、唐代の藩鎮すべてに「牙軍」なる中核部隊（乃至親衛部隊）が存在した如く前提され、とりわけ魏博の牙軍をその典型例とする形で、唐代藩鎮の權力構造のモデルが提示されることが多かったと言える。堀敏一氏⁽¹⁰⁾に代表されるこうした唐代藩鎮の權力構造論は、大要次のようなものである。

魏の牙中軍は、至徳中、田承嗣、相・魏・澶・博・衛・貝等六州に盜據してより、軍中の子弟を召募して之を部下に置き、遂に以て號と爲す。皆な豐給厚賜、驕寵に勝へず。年代浸く遠くして父子相襲ひ、親黨膠固たり。其の兇戾なる者、強買豪奪し、法を踰へ令を犯すも、長吏禁ずる能はず。主帥を變易すること兒戲に同じき有り。史憲誠・何進滔・韓君雄・樂彥禎の如きは、皆な其の立つる所と爲るも、優獎小しく意の如からざれば、則ち族を擧げて害せらる。

（『舊唐書』一八一 羅威傳）

という有名な記事が傳えるように、魏博の牙軍はもとと在地農民を徵募して成立した親衛軍であるが、⁽¹¹⁾やがて「豐給厚賜」に馴んで自らの利益を第一義として動く傭兵集團に轉化し、そのために藩帥の廢立さえ意のままに行うようになる。これが魏博における藩帥支配の不安定性の原因であり、それ故藩帥は唐朝の權威を自己の光背として必要とし、唐朝から完全に獨立し得ない。こうした牙軍勢力の強大化に對し、藩帥は自らの地位を保全するため私的な家兵（家父長制的家内奴隸的性格をもつと規定される⁽¹²⁾）を置かざるを得ないが、その結果、藩帥（家兵）と牙軍の緊張關係はさらに増幅される。ここに唐末までの藩鎮の「中央に反抗しながら在地化しきれない、傭兵的構造の矛盾」が存する。

右のような藩鎮權力構造のモデルを假に「牙軍モデル」と呼ぶとすれば、魏博の「牙軍モデル」を以て唐代藩鎮一般の權力構造の典型とする堀説に對し、これを藩鎮の地域的差異という觀點から批判する大澤正昭氏は、全國の藩鎮を、①河朔三鎮を中心とする「分立志向型」、②長安を占據した朱泚や淮西の李希烈など唐朝權力を否定する「權力志向型」、③四

川・江南など唐朝を支える「統一権力支持型」の三つの類型に区分した。しかし大澤氏も、河朔三鎮については、その軍的特質を「土着的性格を強く持った『傭兵』」⁽¹³⁾「何らかの形で在地との強いつながりを持っていた軍隊」⁽¹⁴⁾という言葉で一括し、そこから自藩の自立体制の維持のみに局踏する三鎮共通の性格（分立志向型）を導き出している。また、谷川道雄氏は、堀氏や栗原益男氏の奴隸制↓封建制という「唐宋變革」理解からする、河朔三鎮（に代表される唐末までの藩鎮）の権力構造に對するネガティブな評價に對して、河朔三鎮の軍社會の中に「一種自立的な官健の世界」を想定し、これを職業の世襲や給與特權といった共通の利害によって結ばれた「仲間集團」とも呼ぶべきものとして指定する。谷川氏はさらに、藩帥の藩鎮支配における「公權的あり方」と「私權的あり方」を對置し、藩帥が、軍政の公正な運営や兵士の權利の保證といった前者のあり方を持す限り、「河朔の舊事」という藩の自立が維持され、逆に側近者の登用や恣意的な軍政など、藩政が後者のあり方に傾くと、藩帥と軍の間に深刻な對立が生じ、「河朔の舊事」は破綻に向かうとして、藩帥の自立的藩軍支配（「河朔の舊事」）とは究極的に軍の利益を保證する機構だったのであり、藩帥を選出し、その地位を認知する主體は軍にあったと論じている。⁽¹⁵⁾こうした兩氏の河朔三鎮の権力構造論は、一見堀説とはひどく異なった印象を受ける。しかしながら、大澤氏にしても谷川氏にしても、やはり魏博牙軍の事例を典型として、これを河朔三鎮全體に敷衍する形で立論がなされていることは同じであり、その意味では、兩氏の説は「牙軍モデル」の批判的繼承と言うことも可能なのではないかと思う。⁽¹⁶⁾

しかし、實の所、河朔三鎮の他の二鎮（成德・盧龍）にも魏博と同様の強大な牙軍が存していたことを示す直接的證據は全くない。のみならず、常用される「牙軍」なる語の定義如何をめぐっても、聊かの見解の相違乃至混亂が見られるのである。まず「牙軍」を「會府に駐在する軍」とし、これを藩内要地に布置された外鎮に駐在する「外鎮軍」と對置する日野開三郎氏の規定がある。⁽¹⁷⁾日野氏によれば、會府駐在の「牙軍」の中からさらに藩帥の親衛軍たる「牙中軍（牙内軍）」が選拔されたという。⁽¹⁸⁾これに對し堀氏は「牙軍」を「使牙（藩帥の政廳）を守る兵隊」とし、「日夜牙城に當直する任務を

【表1】『舊唐書』『通鑑』所見「牙軍」等名稱一覽

A. 「牙(衙)軍」 ※年代順に配列。

No	所屬	用 例	卷	紀・傳
1	魏博	待(田)緒等無聞、令主衙軍。	141	田悅
2	魏博	衙軍怒、取前臨清鎮將田興爲留後。	141	田季安
3	魏博	牙軍立小將田興爲留後。	170	裴度
4	魏博	衙軍立其大將何進滔。	133	李愬
5	魏博	何全皞酷政、爲衙軍所殺。	19上	懿宗
6	天平	以瑄有功、署爲濮州刺史、留將牙軍。	182	朱瑄
7	魏博	牙軍奔歸魏州。	182	諸葛爽
8	魏博	(韓)簡爲牙軍所殺。	182	諸葛爽
9	魏博	(樂)彥禎子從訓忌牙軍。	181	羅弘信
10	魏博	牙軍立其小校羅宗弁。	19下	僖宗
11	魏博	衙軍殺其帥樂彥禎於龍興寺。	20上	昭宗
12	魏博	衙軍立其子副大使紹威知兵馬事。	20上	昭宗
13	魏博	牙軍裨校李公佐作亂。	181	羅威
14	魏博	牙軍頗疑。	181	羅威
15	魏博	幸羅紹威殺牙軍、全獲魏博六州。	20下	哀帝

A'. 『通鑑』武宗紀以降所見「牙(衙)軍」

No	所屬	用 例	卷	年月日(條)
1	宣武	上尋亦自領衙軍相繼北征。	262	光化3.8. 考異
2	魏博	天雄牙將李公佐與牙軍謀亂。	265	天祐2.7. 庚午
3	魏博	田承嗣鎮魏博、選募六州驍勇之士五千人爲牙軍。	265	天祐3.1.
4	魏博	牙軍皆不之疑。	265	天祐3.1.
5	魏博	與(馬)嗣勳合擊牙軍。	265	天祐3.1.
6	魏博	牙軍欲戰而弓甲皆不可用。	265	天祐3.1.
7	魏博	羅紹威既誅牙軍。	265	天祐3.4.

【備考】

※ Aについては、年代順に配列し、個々の用例を挙げた。

※ B以下については、巻數順に配列し、用例は挙げず、中華書局標點本の頁數を附した。

B. 「牙(衙)兵」 (○囲み数字は「牙(衙)卒」)

No.	所 屬	卷一頁	紀・傳
1	行營	20上—742	昭宗
2	蔡州	20上—765	昭宗
3	朔方	121—3491	李懷光
4	魏博	141—3838	田承嗣
5	魏博	141—3848	田弘正
6	成德	142—3885	王廷湊
7	宣武	145—3932	劉玄佐
8	宣武	156—4138	李質
⑨	徐州	156—4138	王智興
10	行營～山南西道	165—4317	溫造
11	武寧	165—4318	溫璋
12	行營～蔡州	170—4419	裴度
⑬	橫海～河陽	172—4461	令狐楚
14	淮南	182—4714	畢師鐸
⑮	平盧	182—4717	朱瑄

B'. 『通鑑』武宗紀以降所見「牙兵」

No.	所 屬	卷	年月日(條)
1	昭義	247	會昌3.4.
2	雲州	253	乾符5.1.
3	魏博	257	文德1.2.
4	魏博	257	文德1.2.
5	行營	258	大順1.8.乙丑

C. 「牙(衙)隊」

1	華州(黃巢軍)	19下—713	僖宗
2	行營	19下—715	僖宗
3	行營	20上—741	昭宗
4	成德	142—3885	王廷湊
5	行營	165—4317	溫造
6	行營	179—4658	張濬
7	行營	200下—5396	黃巢

C'. 『通鑑』武宗紀以降所見「牙隊」

1	監軍使	248	會昌4.8.戊申
2	武寧	250	咸通3.8.考異
3	華州 (黃巢軍)	255	中和2.11.考異
4	宣武	262	天復1.2.考異

D. 「親軍」

1	禁軍	19下—721	僖宗
2	禁軍	20上—777	昭宗
3	宣武	20下—799	哀帝
4	魏博	20下—806	哀帝
5	禁軍	116—3385	承天皇帝煇
6	禁軍	133—3683	李聽
7	盧龍	180—4674	李載義
8	禁軍	184—4766	竇文場

D'. 『通鑑』武宗紀以降所見「親軍」

1	昭義	247	會昌3.6.
2	鎮海	256	光啓3.3.
3	河東	258	大順1.9.
4	成德	259	景福2.4.
5	淮南	259	景福2.4.甲午
6	宣武	259	景福2.9.
7	禁軍	261	乾寧4.1.甲申
8	河東	263	天復2.3.

E. 「親兵」

1	宣武～行營	20上—773	昭宗
2	河中	120—3468	郭晞
3	山南東道	121—3491	梁崇義
4	宣武	133—3677	李愿
5	魏博	141—3852	田布
6	成德	142—3883	王承元
7	宣武～行營	142—3891	王鎔
8	盧龍	143—3896	朱滔
9	宣武	145—3932	劉玄佐
10	宣武	145—3933	劉士寧
11	宣武	145—3933	李萬榮
12	宣武	145—3934	李萬榮
13	河中	147—3976	高郢
14	西川	151—4052	高崇文
15	宣武	156—4137	韓充
16	鳳翔	169—4400	鄭注

E'. 『通鑑』武宗紀以降所見「親兵」

1	河東	255	中和4.5.甲戌
2	魏博	257	文德1.2.
3	河東	263	天復2.3.
4	宣州	265	天祐2.12.
5	宣州	265	天祐3.1.

もっていた…節度使の旗本軍、親衛隊」と規定する⁽¹⁹⁾。「牙兵は、牙中軍ともよばれ、またたんに中軍、あるいは牙内軍ともよばれた⁽²⁰⁾」ともあるから、堀氏のいう「牙軍（牙兵）」は日野氏のいう「牙中軍（牙内軍）」に相當しよう。谷川氏の「唐代藩帥のひきいる直屬部隊はふつう牙軍とよばれ⁽²¹⁾」という記述は、日野氏の規定に近いものである。いづれにせよ、諸家の「牙軍」理解には聊かのズレや混亂が覗われるようであり、このことは直ちに「牙軍」などの語が、そもそも史料上においてどのような意味で用いられているかについての探查を要請しよう。

さて、その史料來源からして、唐代における用法を最も忠實に反映すると思われる『舊唐書』⁽²²⁾の、玄宗朝以降の紀傳における「牙⁽²³⁾（衛）軍」「牙（衛）兵（卒）」「牙（衛）隊」「親軍」「親兵」などの用例を列挙すれば、【表1】の如くである（なお根本史料たる「實錄」を缺き、記述量も減少する武宗朝以降については『通鑑』唐紀——「考異」所引のものも含む——における用例を附した）。

表から一見して明らかな如く、「牙軍」の用例は想外に少なく『舊唐書』で一五例、しかもそのうち一四例が魏博の牙軍を指すものであり、『通鑑』を含めても、唐代において魏博以外に「牙軍」の語が使用されるのは、唐末の二例（しかも『通鑑』は五代期

の史料「唐太祖編遺錄」を引く「考異」しか見出せない。⁽²⁴⁾ 藩帥の親衛部隊の呼稱として最も多く用いられるのは「親兵」であり、次いで「牙兵」「牙隊」であるが、これらはいずれも各藩鎮下において廣汎に用いられている。この點からすると、「牙軍」なる語は、魏博における特定の軍を指す固有名詞的呼稱であった可能性が強くなって来る（なお「牙中軍」なる語は、前掲の『舊唐書』羅威傳に一例だけ見えるが、これは後述するように魏博牙軍の異名・別稱と考えられる）。一方、「牙兵」「牙隊」なる語は、魏博を含めた諸藩並びに行營の下において普遍的に用いられている如くである。この點をどう考えたらよいのであろうか。

まず確認しておくべきことは、日野氏のいうように「牙軍」或は「牙兵」「牙隊」の語が明らかに會府駐在軍の意味で使用されている例は一例もないことである。従って、會府駐在軍の謂として「牙軍」の語を當てることは、少なくとも史料に即していえば不適切と言わねばならないだろう。では「牙軍」或は「牙兵」「牙隊」が、堀氏のいうように使牙・牙城の警衛に當たる部隊を指すかといえ、それにも疑問が残る。山南西道節度使李絳を殺害した亂兵を鎮壓するために派遣された溫造が「八百人を以て衙隊と爲した」というC5の例、河東の李克用を討つため河東行營兵馬部招討宣慰使に任じられた張濬に對し、朱全忠が「汴軍三千を以て濬の牙隊と爲した」というC3の例、同じ際、本軍の側面支援のため張濬の麾下から昭義節度使に派遣された孫揆が、赴任途中に河東軍の奇襲に遭って捕われたときの「揆・（中使）韓歸範、牙兵五百と與に執らはる」というB1の例、また前の溫造の「衙隊」が「牙兵」とも記されるB10の例からすれば、「牙兵」「牙隊」の「牙」は、「使牙・牙城」の謂ではなく、むしろ「牙」の原義たる「主帥の旌旗」に由來し、⁽²⁵⁾ 「牙兵」「牙隊」とは主帥の親衛に當たる「旗本」部隊の謂であつたと考えられる。これは前に拙稿で述べたように、⁽²⁶⁾ 同じく藩鎮時代に頻見する「衙前」や「押衙」の「衙」がやはり旌旗を意味する原義に由來するのと、恐らく通底するものである。従って、魏博牙軍に關わる最も古い記述であるB4の如く、田承嗣が「其の魁偉強力なる者萬人を選びて以て自衛した部隊もまた、藩帥田承嗣の親衛部隊として當初「牙兵」の普通名詞を以て稱されたとして不思議はない。それでは、

かかる普通名詞たる「牙兵」「牙隊」と、固有名詞的に用いられているかに見える魏博「牙軍」の間に、どのような距離があるのだろうか。⁽²⁷⁾この問題を考える上で示唆を與えてくれるのは、同じく『舊唐書』における「親兵」と「親軍」の用例の差である。【表1】から明らかなように、「親兵」は諸藩及び行營下における親衛部隊の稱として廣汎に用いられているのに對し、「親軍」の用例はあまり多くなく、しかもその八例中五例は天子の親軍、すなわち禁軍に對して用いられているのである。一體に「軍」といった場合、そこにはかなりの規模と整然たる組織性をもった部隊というイメージが觀念されているのであろう。⁽²⁸⁾『舊唐書』の記述が唐人の意識を忠實に反映するものとすれば、唐人は「親兵」と「親軍」の間に、ある種のニュアンスの差異を感じていた如くである。さて、魏博牙軍の他の諸藩に比しての際立った特徴といえ、第一に規模の大きさであろう。田承嗣のとき一萬人を以て組織された牙軍は、唐末の天祐三年（九〇六）藩帥羅紹威によって誅滅された際、「凡そ八千家、皆な其の族を破る」（『舊唐書』一八一 羅威傳）というから、唐末に至るまではぼその規模を維持したものである。これに對し他藩の例では、王智興によって編成された徐州武寧の「銀刀都」等七軍が二千人、⁽³⁰⁾汴州宣武軍の「牙兵」が二千（表1 B 8）乃至三千人、⁽³¹⁾「六院兵馬」と號する唐隨（山南東道）の「牙隊」が三千人と傳えられ、また昭義節度使劉悟が鄆州元從の兵二千を「親兵」とし、⁽³²⁾魏博節度使田弘正が成徳に移鎮する際、魏兵二千を「衛隊」とし（C 4）、河陽節度使烏重胤が横海軍に移鎮する際、河陽軍三千人を「牙卒」として隨伴しようとしたこと（B 13）⁽³⁴⁾などからすれば、黃巢の亂以降の戰亂時代は別として、藩鎮の親衛部隊は、二千〜三千人程がまず通常の規模であったと認められ、⁽³⁵⁾魏博のような萬を數える親衛部隊を擁する藩は極めて異例であったと考えられる。第二に、魏博牙軍の特質は、それが一箇の勢力集團として極めて長期に亘って持續したことであろう。「父子相襲ひ、親黨膠固」と稱される強固な團結力をもつ軍が、一百五十年の長きに亘って存続した如き例も、また他に類例を見ないのである。例えば大曆年間（七六六〜七九）にはじまるといわれる宣武の驕兵も、長慶二年（八二二）に至ってその歴史に終止符を打ち、⁽³⁷⁾武寧の「銀刀都」も、長慶年間の成立よりおよそ四十年にして節帥王式の肅清に殞れている。⁽³⁸⁾こ

したことからすれば、魏博牙軍は、その規模及び強固な團結性と持續性の両面において、他藩に卓絶する存在であったと考えられ、まさしく「軍」の名を以て呼ぶにふさわしいものと感じられたのではあるまいか。これが恐らく魏博「牙軍」の固有名詞的呼稱の所以であつたろうと思われる。

このように論じると、前掲の『舊唐書』羅威傳の如く、魏博牙軍が「牙中軍」とも呼ばれていたことが問題となろう。

『舊唐書』二〇下 哀帝紀、天祐三年正月條も、牙軍誅滅の事を「衙内親軍八千人を殺す」と記し、これを「衙外兵五萬」と對置している。これらの「牙中」「衙内」は「牙(衙)城の中(内)」と解する他はなく、實際、牙軍が牙城に宿衛していたことは、同じく羅威傳に「時に牙城に宿する者千人」とあることにより、明らかである。しかしながら、この

「牙中軍」なる語は、『舊唐書』においては、この羅威傳のみにあらわれるもので(因みに殆んど同文を述べる『舊五代史』一四 羅紹威傳は「牙軍」とする)、他に魏博牙軍を「牙中軍」と記す史料も、『冊府元龜』三六〇 將帥部、立功一三、⁽³⁹⁾『宋

史』一五九 張瓊傳など、唐極末々五代のものに限られる點に留意すべきであろう。また『舊五代史』二 梁太祖紀、天祐三年正月條、一四 羅紹威傳、二二 楊師厚傳、孫光憲『北夢瑣言』一四、一七など、該時期においても「牙軍」と記す史料は多い。このことは、「牙中軍」なる語が、牙軍の別稱として唐末以降かなり遅い時期になってから用いられるようになったことを示唆しよう。⁽⁴⁰⁾ 前稿で述べたように、唐後半期以降、「官衙」を意味する「衙(牙)」の用例が盛んになると、「衙前」「押衙」など元來は「衙旗」に由來する名號も、かかる用例に引きずられて、「衙前」は遂に藩鎮の使府や

府州の官衙そのものを指す謂に轉化し、「押衙」もまた使牙の庶務一般を管掌する職としての意を含むようになった。⁽⁴¹⁾ こうした趨勢に照らせば、魏博牙軍についても、それが牙城警衛の任に當たっていたことから、やがてこれを「牙中の軍」の意に解する理解が生まれ、唐極末々五代に至って牙軍の異名・別稱として定着するに至ったのではあるまいか。⁽⁴²⁾

魏博牙軍の特殊性について、今少し別な角度から追究してみたい。一般に藩鎮の親衛軍とは、藩軍中より精銳を抽出して、主戰中核部隊とすると同時に、牙城・使牙の警備・宿衛に當たせたものであろう。これが藩鎮親衛軍の初源的形態

であり、魏博牙軍や、「衙城に番宿」した徐州の「銀刀・鵬旗・門槍・挾馬等の軍」（『舊唐書』一九上 懿宗紀、咸通三年七月條）、「六院兵馬」⁽⁴³⁾と號した山南東道の「牙隊」などはその著例であろう。しかしながら、藩鎮の軍事機構は、時間の経過とともに不斷に複雑化・重層化する傾向にあり、それは親衛軍の組織についても同様であつたと考えられる。例えば、使牙・使宅の警衛に當たる部隊が専従化する場合（「長直」「後院」「後樓」など）⁽⁴⁴⁾や、逆に牙城警衛とは別個に専ら戰鬪を任務とする精銳主戰部隊が設置される場合（淮西の「驍軍」、山南東道の「捕盜將」、西川の「突將」など）⁽⁴⁵⁾、義兒や私兵といった形で藩帥の最信任部隊がさらに内側に設置される場合の他、新任の藩帥が前任地から元従の將士を随伴した場合、これら元従の將士が新藩帥の最信任部隊となり、その藩舊來の親衛部隊と重層的に併存するか、或は舊親衛部隊はその地位を失つて一般藩軍の中に繰り込まれるといったような事態が考えられる。こうしたことから、唐末五代の交ともなれば、かかる親衛部隊の複雑化・重層化といった事態が各藩で發生・進行していた。菊池英夫氏が唐極末の汴州宣武軍（「後梁禁軍」）において指摘した事例は、⁽⁴⁶⁾その尤なるものであろう。宣武には元來「左右堅銳挾馬突將」なる主戰部隊と「左右內衛」なる牙城警護の親衛部隊が存したが、これらはやがて質の低下などにより親衛軍の中核としての信任を失い、やがて長從宿衛を専任とする「左右長直」なる最親衛部隊が置かれたが、これも數的膨張や職務の擴張によつて主帥の直衛のみに従事するものではなくなり、さらに別個に「廳子都」⁽⁴⁷⁾「親隨軍（親從軍）」なる最親親軍が組織されたという。もう一例挙げるならば、やはり同時期、楊行密沒（天祐二年〔九〇五〕）後の淮南藩鎮において、その後繼者となつた楊渥が、行密時代に牙城内にあつた親軍數千の軍營を「遷して外に出し、其の地を以て射場と爲」す一方、壯士を選んで「東院馬軍」と號する部隊を置き、さらに前任地の宣州より自らの親兵三千を呼び寄せたという。なおこれとは別に、揚州には左右牙指揮使張顥・徐溫に率いられる左右の「牙兵」が存していたことが知られ、また主戰決勝部隊としては、有名な「黑雲都」があつた（以上『通鑑』二六六 開平元年正月條）。これらは聊か極端な例としても、唐末ともなれば、こうした親衛軍の構成の複雑化・重層化は、概ね各藩に共通する一般的傾向であつたと考えられる。このような場合、複雑に入り組んだ諸軍の

利害が對立する結果、親衛軍全體が一致團結した一枚岩の勢力となることは自ら困難であつたらう。

これに對し、魏博ではどうであつたか。前述の如く、魏博牙軍は、唐極末の羅紹威の頃においても、その一部（千人）が牙城に宿衛する形態をとつていた。⁽⁴⁸⁾すなわち、魏博においては、親衛軍の複雑な重層化という現象は起きておらず、唯一最強の中核部隊たる牙軍が宿衛にも當たるという、田承嗣以來の初源的形態が保持されていたのである。というより、藩帥としては、強大な牙軍の壓力に對抗するため、自らの親兵を別に設置したくても、それが出来ない状況にあつたと言つた方が正確であらう。唐末の魏博節度使樂彥禎の子從訓が牙軍を忌避して「亡命の徒五百餘輩を召して臥内に出入せしめ、號して『子將』と爲し、委ぬるに腹心を以て」〔舊唐書〕一八一〔樂彥禎傳〕した所、忽ち牙軍の猜疑を招いて父子ともに落命するに至つたことは、その顯著な例證であらう。また羅紹威が牙軍を誅滅する際、「奴客數百」〔舊五代史〕一四〔羅紹威傳〕或は「厮養百十輩」〔舊唐書〕一八一〔同傳〕を率いて牙軍を攻めたところ。この兵力は「親軍」〔舊五代史〕二〔梁太祖紀、天祐三年正月條〕とも記されるが、その内實は上記のような寄せ集めと覺しきもので、朱全忠派遣の援軍の助けがあるとはいへ、萬餘の牙軍に對し、生死を賭けた決戦を挑むにしては、まことに心もとない兵力であると言わねばならない。而してこの「奴客數百」なる手勢は、羅紹威としても恐らくは精一杯の兵力であつたに違いないのである。

以上のことから、魏博牙軍の特殊性のもう一つの面が明らかにならう。魏博においては、牙軍の壓力により、藩帥がより内側に親兵を設置することが出来ない、すなわち親衛軍の重層化が許されない状況にあつたのである。もとより他藩に比して大きな規模をもち、しかも在地魏博管内から編成され、父子相襲されることで、強い地域性（地域的紐帶意識・一體性⁽⁴⁹⁾というべきか）と一枚岩の強固な團結力をもつた軍が、主戦部隊にして宿衛部隊という田承嗣以來の初源的形態を保持したまま唐末に至るまで存続し、藩の自立（河朔舊事）を支える主體となるとともに藩帥にとっては絶えざる脅威となる。これこそが、他に類例を見ない、まさしく固有名詞によつて呼ばれるにふさわしい魏博牙軍の特質であつたと考えられる。ということは、これを「傭兵的原理」によつて捉えるか、一種の「仲間集團」として規定するかはさて置き、い

ずれにせよ魏博の「牙軍モデル」を基準として、唐代藩鎮一般の、或は河朔三鎮一般の權力構造を論じることが極めて危険と言わざるを得ないのである。次には、魏博と成徳の對比を通じて、この點をさらに追究してみたい。

II 成徳軍藩鎮における軍構成と權力構造の特質

(1) 魏博・成徳兩藩の成立の事情と軍構成の特質

本節ではまず、前節で見たような魏博牙軍の特殊性の由來を考え、これを成徳における藩軍構成と對比するために、兩藩の成立事情に遡ってみたい。

魏博の初代節度使田承嗣は、安祿山の洛陽攻略の前鋒を務めた後、主に河南戰線で活躍し、南陽(鄧州)・潁川(許州)・衛州・淮西などを轉戦した末、亂末期の寶應元年(七六二)には反亂軍の睢陽(宋州)節度使の任にあり、翌廣徳元年初、史朝義に従って河北を敗走する途中、莫州において唐朝に降り、一旦莫州刺史に安堵された後、あらためて魏州刺史・魏博貝滄瀛五州都防禦使に任じられた。⁽⁵²⁾以上の経緯からすると、田承嗣は魏博就封の當初、自らの手勢として率いる將兵を殆んど持っていなかったと思われる。魏博が管區とする河北南部から河南北部にかけては、安史の亂後期の主戰場となつた地域であり、同じく反亂軍から降って該地域の相衛節度使に任じられた薛嵩の場合、その就封當初のこととして「時に兵は百に満たず、馬は惟だ數駟のみ」と傳える史料があるが、聊か誇張はあるにせよ、全體的狀況を覗わせるに足りよう。こうした状況下において、領土擴張の野心に満々たる田承嗣にとり、強力な藩軍の創建は早急第一の課題であつたに違いない。田承嗣をして「管内の戸口を擧げ、壯者は皆な籍して兵と爲し、惟だ老弱なる者をして耕稼せしめ、數年の間に衆十萬有り」(「通鑑」二二二 廣徳元年六月庚寅條)と傳えられる在地からの徴兵による強引な軍の編成に踏み切らせた背景には、かかる事情が存したものと思われる。かくして「其の驍健なる者萬人」が選拔され、魏博牙軍は成立したので

あった。

これに對し成德はどうであつたか。成德軍の會府恆州を中心とする河北西北部は、安史の亂初期においては、有名な顏眞卿の從兄常山（恆州）太守顏杲卿のレジスタンスに見られる如く、唐朝側と反亂軍の激戦の舞臺となつたが、至德元載（七五六）九月、史思明により常山・趙郡（趙州）が最終的に反亂軍の手に歸して後は、専ら河東方面の官軍と對峙する持久戦に轉じ、亂の末期に至るまで戦線の動きは殆んどなかつた。成德の初代節度使張忠志（安忠志）は、早くも安祿山存命中に「精兵を率ゐて土門に軍」したといひ（『通鑑』二二七 天寶十四載十一月甲戌條）、至德二載には安慶緒によつて常山太守兼團練使に任命されている。同年末、張忠志は史思明により一旦范陽に召還されるが、⁽⁵⁴⁾やがてまた恆州刺史・恆趙節度使を授けられ、兵三萬を以て常山を守り、⁽⁵⁵⁾亂末期の寶應元年十一月、恆陽節度使のまま恆・趙・深・定・易五州を以て唐朝に歸順し、舊領をそのまま安堵された上、成德軍の軍額と李寶臣の姓名を賜つたのである。⁽⁵⁶⁾

以上から明らかなように、李寶臣は成德軍の地に安史の亂中より長らく在任しており、従つて安史時代の兵力をそのまま繼承しながら唐朝に稱藩したのであり、その中には「勇を以て燕趙に聞こえ、時に張阿勞・王沒諾干と號し、二人齊名あり」（『舊唐書』一四一 張孝忠傳）と謳われた張孝忠・王武俊といった錚々たる武將も含まれていた。従つて、李寶臣には田承嗣のように在地からの大規模な徵發によつて新たに軍を編成する必要はなく、「亡命の徒を招集」（『舊唐書』一四二 李寶臣傳）する形で補強を行へば足りたのであらう。こうしたことから、成德軍は安史以來の舊將を數多く抱えていた筈であり、前掲の奚族乙失活部出身の張孝忠、契丹怒皆部出身の王武俊の他、安祿山の帳下の將から史思明のとき定州刺史となつた程元皓⁽⁵⁷⁾、趙州刺史を以て官軍に降つた盧倣⁽⁵⁸⁾、同じく反亂軍の趙州刺史に在任した陸濟⁽⁵⁹⁾、史思明軍中から成德軍の馬軍都虞候となつた曹閏國⁽⁶⁰⁾（舊六胡州の一、含州河曲の人といふ）などの例を數えることができる。また、のちの藩帥王廷湊の曾祖五哥子（回鶻阿布思の出身）⁽⁶¹⁾、靈州出身の康日知⁽⁶²⁾、李寶臣のとき定州刺史であつた谷從政（昧谷氏なる北族出身）⁽⁶³⁾の如き塞外民族出身者も、多くは安史以來の舊將であつたらう。

【表2】「李寶臣碑陰」所見軍將名

軍 職 號	姓 名
馬軍都使・行易州刺史 左廂馬軍都使 右廂馬軍都使	李倍雄 李日新 趙聞諾
節度押衙・左廂步軍都使 節度押衙・右廂步軍都使	康日知 盧俶
成德軍副使・知成德軍事	陸濟
節度押衙	康如珎・胡道琛
都知教練・左右廂步軍都虞候 □□廂馬步□虞候 左廂馬步□□□	衛常寧 李光庭（節□□前將） 〔不明〕
都知征馬使	謝靈運
行深州刺史 兼定州刺史・充北平軍使 兼冀州刺史 權知趙州刺史 權知易州刺史・兼高陽軍使	李獻誠 谷從政 源恆 段慶瑀 □□□
左廂馬軍十將	辛忠順・辛安國・李阿布俱・田零□・王魏皎・□□順・王武俊
右廂馬軍十將 ？廂馬軍十將	張□稽・張□□・□金德・安忠實・李孤莫羅・張溫禮 〔不明〕・高恆
左廂步軍十將 右廂步軍十將 ？廂步軍十將	劉如价・李固烈（節度押衙）・何山泉 李惟忠・張卜高 李□□
左廂？軍十將 右廂？軍十將	何□□ 〔不明〕・李盡忠
左廂虞候惣管 右廂虞候惣管	孫李學 陳希俊
衙前將	楊旻・康日琮
不 明	李隘都・李處留・□壽金
職號記載なし	王萬勝・孫□朱・李禪・張孝忠・趙□□・曹敏之・史招福

〔表2〕は、李寶臣就封當初の永泰二年（七六六）七月一日の日附をもつ「李寶臣碑碑陰」（沈濤『常山貞石志』一〇）に見える成德軍下の軍將名を、軍職ごとに整理して表記したものである。この中で塞外民族出身者と見られるのは、前掲の張孝忠・王武俊・康日知（衙前將康日知はその同輩行か）・谷從政や、李阿布俱（左廂馬軍十將・李孤莫羅（右廂馬軍十將）など明らかに胡名をもつ者の他、右廂馬軍都使の趙聞諾は、羅振玉『京畿冢墓遺文』中に収める「（成德軍大將）張懷實墓誌」に「夫人天水趙氏、馬軍都使・開府儀同三司文諾葛の子、馬軍使日林の妹なり」と見える趙文諾葛その人と思われるから、これも塞外民族出身者であろう。のみならず、張孝忠・王武俊といった例から類推すれば、碑文中に頻見する「忠」「順」などの文字をとりどりにあしらった極めて作爲的な名前の持ち主たちも、多くは塞外民族の出身者でなかったかとの疑いを多分に抱かしめる。⁽⁶⁴⁾ともあれ、權德輿が「恆冀の馬軍素より勁し」（『權載之文集』四七「恆州招討事宜狀」と言うように、これら塞外民族出身の軍將に率いられた馬軍が成德の軍事力の中核を占めていたであろうことは想像に難くない。⁽⁶⁵⁾その意味で、李寶臣時代、成德が「勇は河朔諸帥に冠たり」（『舊唐書』一四二「李寶臣傳」と稱されたのも強ち誇張の言ではなく、大曆十年（七七五）、田承嗣が成德・幽州兩藩を交戦せしめんとして李寶臣に説いた「公精騎を以て前驅し、承嗣歩軍を以て之に繼がば、蔑んぞ克たざらん」（『通鑑』二二五「大曆十年十月條」という言葉は、流石に彼此の軍の特質をよく認識したものというべきであろう。⁽⁶⁶⁾

なお、成德軍においても在地の人間が募兵に應じた例は無論あろう。⁽⁶⁷⁾谷川道雄氏は、安史の亂後期における反亂軍の募兵の對象として河北の人民を考え、かつて地方官の指導下に激しいレジスタンスを展開した在地の自衛集團への接觸を想定しているが、⁽⁶⁸⁾そのレジスタンスが反亂軍との激しい攻防戦の末に撃破・潰滅させられた経緯からすれば、「父老」「郡豪」層に率いられた在地の自衛集團がそのままの形で反亂軍に取りこまれたのではないかとする氏の想定には、明證がない以上、俄かには従い難い所である。上述のように李寶臣が「亡命の徒を招集」したとある如く、かかる募兵には、戦亂によって田地を失った農民や無頼・遊俠の徒が個々に應募したと考える方が自然であろう。「田神功、冀州の人なり。家

本と微賤、天寶末、縣の里胥と爲る。會々河朔兵興るにより、幽薊に従事す」(『舊唐書』一二四 田神功傳)とあるのはその一例であり、安史の亂によつて北平(幽州)から上黨(潞州)に流寓した田意眞なる者の長子が河東軍に投じ、他の三子(69)が昭義軍に投じている如きは、河朔の流亡農民の多くが辿る道であつたろう。成徳の兵力は、滄州を巡屬に加えた大曆十年(七七五)以降、五萬人と伝えられるが、(70)つまるところ、これは安祿山舉兵以來の「精兵」乃至「胡兵」(71)に、亂後期における河北の募兵(前述の如く亂の末期にこれらを併せた兵力を三萬と傳える)、亂後に招募した「亡命の徒」など、各種の兵を混成して形成された兵力であり、魏博牙軍のように、當初から等質性と地域に根ざした強固な親黨意識を藏して成立した軍とは、自ら性格が異なつていたと考えるべきではないだろうか。成徳の場合、その軍事力の中核を擔い、またそれ故に藩帥の地位を脅かす要因ともなつたのは、まず何よりも、配下に數多く抱えこんだ安史以來の有力諸將層であつたと考えられる。成徳軍藩鎮の權力構造は、魏博の「牙軍モデル」とは別個に、むしろ藩帥とかかる有力諸將の關係に焦點を當ててあらためて考察がなされるべきであらう。そして、この點を念頭に置いて成徳軍における藩帥交替の状況を眺めてみるならば、そこに見出されるのは、まさしく藩帥と諸將の對立・葛藤の様相なのである。

(2) 成徳軍における藩帥交替と權力構造の特質

成徳の初代藩帥李寶臣はその晩年、子惟岳の暗懦ゆえ「諸將の服さざる」を慮つて「大將辛忠義・盧倣、定州刺史張南容、趙州刺史張彭老、許崇俊等二十餘人を殺し」ており(『舊唐書』一四二 李寶臣傳)、藩の名だたる武將、易州刺史張孝忠・定州刺史谷從政・兵馬使王武俊らも猜忌を受けて極めて危うい状況にあつたと傳えられる。(72)こうした中で、建中二年(七八二)李寶臣が急死し、子惟岳が自立して朝廷に節鉞を請うたが、若年氣鋭の德宗はこれを認めず、惟岳は魏博・平盧の支援を得て連兵拒命に踏み切つたが、もとより威望のない上に側近政治を強行する惟岳に對して藩内の動搖は強く、有力諸將が次々と離反していった。谷從政は惟岳に諫言を試みて容れられず、身邊に壓迫が加わるに及んで自殺し、張孝忠

と趙州刺史康日知はともに州を以て歸順した。そして建中三年初、趙州討伐に派遣された王武俊は、ついに戈を倒にして惟岳を斬り、朝廷に降ったのである。さきに李惟岳の軍と交戦した張孝忠は「恆州宿將尙ほ多し」(『舊唐書』一四一 張孝忠傳)との言を残しているが、かかる「宿將」の多くはそのまま王武俊の麾下に残されたことであろう。王武俊は朝廷の戦後處理を不満として再び叛旗を翻し、興元元年(七八五)に恆・冀・趙・深四州の節鉞を認可されるまで、官軍との激戦に明け暮れるが、その際にも諸將層との葛藤は避けられなかった如くである。王武俊のクーデター直後に定州で没した軍將張懷實の墓誌銘に「方隅靜かならず、豪傑相傾け、瓜李嫌を成し、凶災奄及す」(前掲「張懷實墓誌」とあるのを見れば、その最期は恐らく尋常のものではなく、藩内が動揺して疑心暗鬼の巷と化していた様子が覗えようし、建中三年十一月には、王武俊とともに李惟岳打倒のクーデターに参畫した衛常寧が謀叛をはかって腰斬に處されている(『通鑑』二二七 同條)。こうした状況は、次の王士眞(武俊の子)の時代にも何程か持ち越されたようである。趙萬敵なる者は王武俊の騎將として「驍悍燕趙に聞こえ」(『舊唐書』一四二 王承宗傳)た者であるが、王士眞のとき入朝して禁軍の將となっている。この趙萬敵は、王士眞の子承宗が自立拒命した際には率先して憲宗に攻討を進言していることからして、その入朝の背景には藩帥王士眞との間に何らかの軋轢があったのではないかと推測される。

このように成徳においては、藩帥と諸將層の間に潜在的な緊張関係が存していたと考えられ、節鉞の繼襲が拒否され朝廷に拒命するなど、藩帥の地位が動揺したときには、かかる緊張関係や葛藤が一舉に顕在化したものと考えられる。それ故、成徳の藩帥にとって、自己の地位を固めるため、唐朝の權威をいわば光背として身に纏っておくことは、中々に重大な意味をもっていたことであろう。李寶臣が、藩内においては唐朝の年號とともに自己の就封を元年とする紀年を用いる(74)といった驕横を逞しくしながら、その一方で、安史の亂中に破壊された玄宗の銅像が恆州のみ残っていたと伝えられ(75)、王士眞が正規の租税上供こそ行わないものの歳貢・進奉は年に數十萬に及び「幽魏二鎮に比して最も承順」(『舊唐書』一四二 王士眞傳)と稱された背景には、恐らくかかる藩内事情があったものと思われる。しかしながら、王士眞に續く王承宗・

王承元・王廷湊の時代は所謂「憲宗の中興」の時期に當たり、唐朝の河朔三鎮への介入壓力は強まり、或は唐朝との全面對決へと發展する中で、藩帥と諸將層との葛藤も一段と嚴しさを増すことになった。

憲宗の元和四年（八〇九）、王士眞が没して王承宗が節鉞の繼襲を求めた際、朝廷はこれを「累月不問」に置いたため、承宗は「久しく朝命を得ざるにより、頗る懼れ」、ついに德・棣二州の奉還を以て安堵を請うに至った（『舊唐書』一四二王承宗傳）。その後、承宗は「諸父と容れず」（同前）と伝えられる如く、叔父たちと協せず、實際に武俊の第四子王士則が京師に出奔する事件や、深・冀・趙三州刺史を歴任した武俊の從子王怡が官軍に款を通じて誅される⁽⁷⁶⁾といった事件が起きている。なお、王承宗の弟承慶は平盧節度使李師道の「親將」となっており（『新唐書』二二三李師道傳）、兄弟間にも何らかの軋轢が存した可能性を覗わせる。また王武俊の部將であつた李全略（王日簡）は、承宗のとき「其の軍に虐用」され、自拔歸朝している⁽⁷⁷⁾（同前、李全略傳）。さらに紹介した權德輿の「恆冀の馬軍素より勁し」の言は王承宗時代のことであり、精強を誇る成徳の馬軍が健在であつたとすれば、これを率いる諸將層もまた多く存していたことであろう。實際、牛元翼・傅良弼・李寶らそのうちの幾人かの驍勇の程は、後の王廷湊時代に遺憾なく發揮されることになる。しかし、王承宗もまた父祖に恥じぬ秀れた將才の持ち主であり、元和四・五年、十・十二年の二度に亘る朝廷の攻討を力戦の末に退けたことは、承宗がかかる諸將層との軋轢をよく抑えて、藩軍の統制に成功していたことを示すものであろう。しかしながら王承宗の奮闘もここまでが限界であり、元和十二年の淮西留後吳元濟の滅亡を見届けると、翌十三年、德・棣二州の奉還と二子の入朝を以て朝命に服するに至つたのである。

次の王承宗の弟承元の繼襲については、元和十五年冬、承宗が没した當初、祕して喪を發せず「大將らは帥を旁郡より取らんと謀」った（『舊唐書』一四二王承元傳）とあることが甚だ注目される。これを魏博における藩帥擁立の状況、すなわち「衙兵數千、（田）興の私第に詣りて陳請す。興拒みて關より出でざるに、衆呼噪して已まず」（『舊唐書』一四一田弘正傳）、「（史憲誠）亂に乗じて河朔の舊事を以て其の人心を動かす。諸軍即ち擁して魏に歸り、共に立てて帥と爲す」

(同一八一 史憲誠傳)、「軍衆史憲誠を害し、聲を連ねて呼ばはりて曰く『衙内都知兵馬使何端公留後を知れば、三軍安んぜん』と。推して之を立つ」(同前 何進滔傳)などと比べるならば、兩藩の事情の相違は自ら明らかであろう。魏博においては、藩帥擁立の主體は「衙兵數千」「諸軍」「軍衆」と表現される牙軍集團全體にあつたのに對し、成徳においては、主導權の所在は専ら「大將」のレベルにあつたのである。王承元の繼襲は結局、參謀崔燧らの畫策(「兵を握する者」或は「諸校」と謀つたとある⁽⁷⁸⁾)により、王武俊夫人涼國夫人の命を以て「諸將及び親兵」に告諭する形で行われているから(『舊唐書』一四二 王承元傳)、「親兵」もまた藩の政治上、それなりの地位を占めていたようではある。しかしこの後、もともと繼襲に乗り氣でなかつた王承元が「河朔の舊事」を放擲して入朝請代を願ひ出、朝廷から滑州移鎮の命が下つた際には、「諸將亦た悔ゆ」「館驛に諸將を召して之を諭すも、諸將號哭諍譁す」などと、あくまで「諸將」を主體とする記述が見られ、「前者に李師道未だ敗れざる時、議して其の罪を赦さんとす。時に師道行かんと欲するも諸將之を止む。他日師道を殺すも亦た諸將なり」という承元の説諭もまた明瞭に「諸將」を對象としてなされている。そして承元は、あくまで留任を請う「牙將李寂等十數人」を斬つて滑州に赴任していくのである(同前)。

王承元に代つて成徳に入府したのは魏博から移鎮した田弘正であるが、長慶元年(八二一)七月、その田弘正を殺害して留後を自稱したのは、曾祖五哥子以來、代々騎將を務めた成徳の宿將、都知兵馬使王廷湊であつた。⁽⁷⁹⁾王廷湊は、田弘正の藩政に對し「毎に其の細故を挾り衆心を激怒せしめ」(同前 王廷湊傳)る軍内工作を行った上で、一夜「衙兵」と結んで府署を襲い、田弘正一族を塵殺しているから、この慘劇が軍内の兵士の支持と参加の上で行われたことは確かであろうが、しかし、このクーデターが軍衆による「下から」の擁立ではなく、宿將王廷湊の主導下に「上から」計畫・發動されたものであることも事實である。ともあれこの王廷湊のクーデターに對し、唐朝はいち早く問罪攻討の方針を明示し、また「成徳に在りて名は廷湊より出づること遠甚」(『新唐書』一四八 牛元翼傳)と稱された深州刺史牛元翼、その牛元翼とともに「二人諸將に冠たり」(同前)と伝えられる樂壽鎮遏兵馬使傅良弼など、成徳の有力諸將には、同列中より抜き

ん出て藩帥の座を僭取した王廷湊に對する反感があつたであらうから、勢い廷湊と有力諸將の間には鋭い緊張を生じざるを得なかつた。廷湊がクーデター後、まず對處しなければならなかつたのは、官軍との戦鬪よりも、むしろこれら有力諸將との葛藤であつた。クーデターの翌月には、冀州刺史王進岌が殺され、深州刺史牛元翼は州を擧げて朝廷に歸順し、會府鎮州では「大將」王位ら五人が謀叛をはかつて部兵とともに殺されるという一連の事件が起き、樂壽鎮退兵馬使傅良弼、及び樂壽と並ぶ「劇屯」と稱された博野の鎮將李寶も相次いで廷湊に背き、廷湊及びこれと結んだ幽州の軍に對し、頑強な抗戰を展開したのである。王廷湊は、官軍の攻討を退けて、翌長慶二年二月、朝廷の赦を得て節鉞を安堵されるが、にもかかわらず牛元翼・李寶らに對する攻圍を解こうとしなかつたから、あくまでかかる有力諸將を肅清して、後顧の憂いを斷たんとしたかの如くである。結局、傅良弼と李寶は手勢を率いて圍みを突破し、深州は牛元翼が城を脱出した後ようやく降り、その麾下の將吏百八十餘人が屠戮されて、一應の決着を見たのである。⁽⁸²⁾

以上、煩を厭わず李寶臣より王廷湊に至る成徳の藩内情勢を概観して來たが、その基調にあるのは、魏博の如き牙軍集團と藩帥の對立ではなく、諸將層と藩帥間の對立・葛藤であることが明らかになつたと思う。こうした諸將層は、張孝忠が定州刺史谷從政の妹を妻とし⁽⁸³⁾、前掲の「大將」張懷實が馬軍都使趙文諸葛の女を妻とし⁽⁸⁴⁾、王承宗のとき權深州刺史・攝冀州刺史を歴任した楊孝直が成徳軍衙前左廂步射兵馬使男承嗣の女を妻とし、同じく成徳軍節度馬軍右廂兵馬使兼南先鋒馬□副兵馬□押牙李某が馬軍左廂兵馬使兼南先鋒馬步副兵馬使の女王氏を妻としている如く、相互に婚姻を結び、また次の【表3】に掲げる如く、軍將の職を父子世襲する例も多く見られたことと思われる。

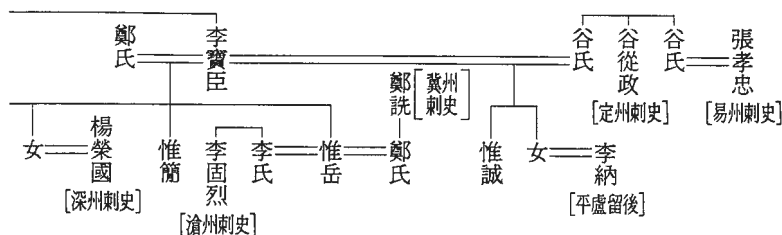
一體に所謂「順地」の藩においては、藩帥の轉任に伴う元從や、他藩や神策軍からのスカウトなどにより、軍將の藩外への異動は想像以上に活潑であつたようであり、父子が異なる藩に勤務する例も珍しくない⁽⁸⁶⁾。こうした一般の諸藩に對して、成徳のような「反側」の藩においては、他藩への異動の機會は極めて少なかつたと考えられ、必然的に同じ藩内において長年の勤務に従事したことであらう。こうしたいわば藩生え拔きの諸將が、婚姻と世襲によって鬱然たる勢力を形

【表3】 成德軍下における軍將の世襲例

No.	父—子 世 襲 例	時 期	典 據
1	王武俊（兵馬使）—王士眞（李寶臣の「帳中親將」）	李寶臣～李惟岳	『舊唐書』142
2	程元皓（定州刺史）—程日華（定州押衙）	李寶臣～李惟岳	『舊唐書』143
3	趙文諾葛（馬軍都使）—趙日林（馬軍使）	李寶臣～李惟岳	『京畿』中「張懷實墓誌」
4	王五哥子（王武俊假子）—王末怛活—王升朝（「世爲王氏騎將」）—王廷湊（衙內兵馬使）	李寶臣～王承元	『舊唐書』143
5	楊達（節度征馬野牧使兼中軍都知兵馬使）—楊孝直（攝冀州刺史）—楊邈（鎮州衙前兵馬使）	李寶臣～王元逵	『襄陽』「楊孝直墓誌」
6	李固烈（滄州刺史）—李忠義（馬步兵馬使）—李英信（節度押衙）—李守□（趙州防禦使）—李仲球（親事副將）	李寶臣～王景崇	『京畿』下「李公夫人王氏墓誌」
7	李全略（鎮州小將）—李同捷（將校）	王武俊～王承宗	『舊唐書』143
8	王列（馬軍兵馬使）—□—王實直？（馬軍左？廂兵馬使兼南先鋒馬步副兵馬使）	？ ～王承宗	『匯編』「李君妻王氏墓誌」
9	馬良（節□押衙兼充衙前都虞候）—馬□□（知鼓角將）	？ ～王鎔	『匯編』「馬良及妻梁氏合葬墓誌」
10	紀奏（冀州馬步都虞候）—紀晏（深州饒陽鎮退都將）—紀審（左步建武將）—紀豐（俠馬將）—紀爽（衙前兵馬使・左親騎指揮使）	？ ～王鎔	『京畿』下「紀豐及夫人牛氏合祔墓誌」
11	孟文德（節度都迴厝錢穀都知官）—孟弘敏（東門親事兵馬使・宅內鞍轡庫□知官）—孟守根（東門義兒）	？ ～王鎔	『京畿』下「孟弘敏及夫人李氏墓誌」
12	楊某（東門討擊副使・宅內染坊都監）—楊璋（節度衙前兵馬使）	？ ～王鎔	同 上
13	李某（親從左廂都押衙・都迴厝商稅使）—李思葉（束鹿縣令・防禦兵馬使）	？ ～王鎔	同 上

※ 出典略號：『京畿』…『京畿冢墓遺文』。『襄陽』…『襄陽冢墓遺文』。
『匯編』…『隋唐五代墓誌匯編』河北卷。

(※ 出典：『舊唐書』142 『新唐書』211 『通鑑』225～27)



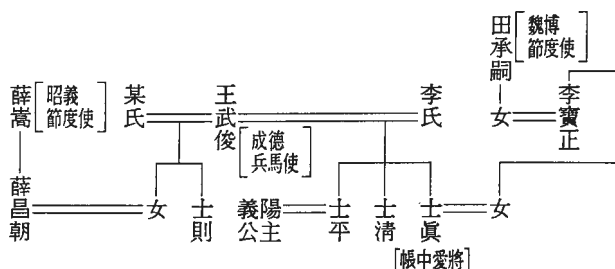
成し、藩帥との間に潜在的な緊張関係を宿していた點に、成德軍藩鎮の權力構造の特質があったと思われるのである。⁽⁸⁸⁾

こうした藩内情勢にあって、藩帥の側では、一族の者を州刺史などの重職に任じたり、有力軍將との間に婚姻を結ぶなどの施策が多くとられた。⁽⁸⁹⁾これは初代李寶臣（李惟岳時代）に最も著しく、その婚姻関係を示せば【圖1】の如くである。王武俊時代においても、長子士眞が德州刺史、次子士清が冀州刺史を務め、また驍勇敢闘を愛された五哥子が武俊の假子とされており、王士眞（王承宗時代）には武俊の從子王怡が深・冀・趙三州刺史を歴任している（『舊唐書』一四二 王武俊（王承宗傳））。王廷湊以降も、次帥王元逵のとき、次子紹烈が趙州刺史、季子紹懿が深州刺史、一代において王紹懿のとき、兄紹鼎の子景胤が深州刺史、次の王景崇のとき、弟景儒が冀州刺史といった如くであり、⁽⁹⁰⁾また有力諸將との婚姻も、李固烈以來四代に亘って成德の將を務め、深・趙二州刺史を歴任した李守□に藩帥王元逵の長女が嫁いでいる例を見ることが出来る。⁽⁹¹⁾

(3) 所謂「三軍推立」と成德軍における「兵」について

王賽時氏は唐代藩鎮の基本的階層構成として「帥」「將」「兵」の三者を設定し、この三者相互の關係の分析を通じて藩鎮の政治的動向を探るべきことを提言している。⁽⁹²⁾これに従えば、成德において藩の政治的動向を左右する要の地位を占めていたのは「將」であったということになるが、それでは成德における「兵」のあり方はどの

【圖1】 藩帥李寶臣・李惟岳時代における婚姻關係



ようなものであったのか、本節は限られた史料の中からこの問題についての探求を試みるものであるが、その前に、史料上しばしば見られる「三軍推して留後と爲す」「三軍推して軍事を主らしむ」などの表現について考察しておきたい。というのも、谷川道雄氏はかかる表現から「河朔三鎮における新藩帥の成立には、『三軍推立』が手続上の原則となっていたのではないか」と論じ、將兵あわせた「仲間集團」としての「軍」(藩帥を選ぶ主體は、究極的に軍である)という結論への導糸とされているからである。⁽⁹³⁾

成徳における藩帥繼襲に際しても、李惟岳・王承宗・王承元・王元逵・王紹懿・王鎔などについて「三軍推立」乃至これに類した記事が認められる(『舊唐書』一四二)。しかし、これを額面通り軍による擁立(或は軍を主體とする繼襲承認)と受け取るのは聊か躊躇せざるを得ない。例えば「三軍推して留後と爲す」と記される李惟岳の場合、実際には、孔目官胡震・家僮王他奴らの側近勢力により、前帥李寶臣の喪が秘せられたまま、寶臣の表と稱して朝廷に繼襲の認可を要請し、これが拒絶されるや、喪を發して留後を自稱し、今度は「將佐をして共に奏して旌節を求めし」めた(『通鑑』

二二六 建中二年正月戊辰條)というのが真相であり、「軍中其の弟承元を推して留後と爲す」と稱される王承元の場合も、前節で見た如く、參謀崔燧らの畫策により祖母涼國夫人の命を以て承元の繼襲を軍中に發布したものである。またやはり「三軍推して留後と爲す」という王鎔の場合も、その實、前帥王景崇が「遺表して子鎔を以て戎事を續繼せしめんことを請ふ」(『舊唐書』一九下 僖宗紀・中和二年十二月條)たものであった。同様の例は他藩にもあり、要するに「三軍推立」とは、自立諸藩における藩帥の繼襲の際の形式的・慣用的表現(「三軍」そのものが『周禮』の「大國(諸侯)三軍」に由來する形

式的措辭であることに留意すべきであらう）であると同時に、恐らくは朝廷に對して「軍中の推立」と稱した方が節鉞の認可が降り易いという事情があったものと思われる。實際、平盧藩においては「皆な其の子を署して副大使と爲し、父死せば子立ち、則ち三軍の請を以て聞」した（『舊唐書』一二四 李師道傳）といい、横海節度使李全略の子同捷は「託するに三軍の留まるを乞ふを以て」（同・一四三 李同捷傳）朝命を拒み、幽州の部將張絳が留後陳行泰を殺して「三軍をして上表せしめ、符節を降さんことを請」うた（同・一八〇 張仲武傳）とある如きは、端的にそうした事情を示すものであらう。こうしたことからすれば、自立諸藩における藩帥の繼襲の場合、新帥は世襲であるとクーデターの交替であるを問わず、軍中の輿望を擔つて推立された旨を標榜して節鉞の安堵を求めたに相違なく、恐らくはかかる奏請が「三軍推立」なる形式的措辭を以て史官の記録に徴されたのではないかと思われる。従つて、魏博のように牙軍集團が藩帥擁立の主體となつたことが明らかな事例は別として、そうした明證を缺くままに「三軍推立」の語から直ちに藩帥選立の主體が「軍」であつたと論じるのは、聊か飛躍が大きすぎるのではあるまいか。ここにもまた、魏博「牙軍モデル」を無意識のうちに河朔三鎮一般に敷衍する弊が存しているように思われる。

さて、成徳における「兵」のあり方を考えるに、成徳における軍の形成が、多く塞外民族出身の武將に率いられた安史以來の兵力を中核として、「亡命の徒を招集」する形で行われたことは前述したが、王廷湊が朝廷に拒命したときも、穆宗初年の銷兵政策により落籍して山澤に盜となつていた軍士が「一呼にして亡卒皆な集ま」つた（『通鑑』二四二 長慶二年二月條）と伝えられる。成徳においてはやはり、魏博牙軍の如き地域に根ざした強固な凝集力をもつ兵士集團が組織的に創出されることはなかつたようである。成徳においても、兵士層の一部が世襲的に軍に勤務する例はあつたろう。しかしそれは、反側と順地とを問わず、ある意味で唐代藩鎮一般に見られることであつて、それが直ちに魏博牙軍の如き特權的な兵士集團の形成を意味したとは思われない。成徳の場合、前記王廷湊による募兵の事例や、唐末の烏震が「冀州信都の人なり。少くして孤なれば、自ら郷校を勤め、弱冠にして從軍す」（『舊五代史』五九 烏震傳）といい、同じく符習が「趙

州昭慶縣の人なり。少くして從軍す」（同前 符習傳）というように、成德管内の民が貧孤などの理由で新たに入軍している例からして、むしろ兵士層には不斷の新陳代謝があったことが想定される。また、成德においては、成立時より安史以來の宿將を數多く擁し、もともとその威望は高かったと思われるとともに、彼らが世襲や婚姻により牢固たる勢力を保持していたとすれば、彼ら「將」と「兵」の間に自ら地位の懸隔があったと思われる。

公、本と深州饒陽縣の人なり。樂亭「壽？」に別業して積むに餘載有り。曾頌、皇朝の絳州長史に任ぜらる。祖徽、高尚にして不仕。考承泰、頃ろ城戍艱虞を以て、此の城幽州の攻圍を被るに、公、倜儻の材を負ひ、誠を輸して效を展べ、去る元和四年、成德軍節度使の牒を授かりて、十將に補充せられ、兼ねて樂壽鎮遏都知兵馬使苑公の押衙に充てらる。公君平、將子の子なれば、軍前に赴赴として干城の志あり、信義もて立身し、孤標もて操を作す。……

（黃本驥『古誌石華』二〇「張君平」）

とは、大和八年（八三四）に三十六歳で没した張君平の墓誌であるが、樂壽縣に別業を營んでいたというから在地上層の人であろうか。誌文に言うように、元和四年（八〇九）の王承宗の拒命によって樂壽は盧龍節度使劉濟の攻圍を受けたが、このとき初めて君平の父承泰が軍に身を投じ、藩の下級軍職たる十將⁽⁹⁸⁾の職を授けられた如くである。しかしながら、その子君平は「軍前に赴赴として干城の志あり」と記されるように、やはり軍に職を奉じた如くでありながら、藩の軍職（軍將の肩書き）は記されていない。これは、在地から藩軍に登用される例は確かにあったが、かかる新參の者が軍將の地位を世襲的に保持して、諸將層の一畫に座を占めることは、中々に困難であったことを物語っているのではあるまいか。⁽⁹⁹⁾

一體に、唐代藩鎮において「將」「兵」間には一定の地位の懸隔があったと考えられ、「兵」は功なくして「將」に昇り得なかったし、⁽¹⁰⁰⁾「將」が麾下の「兵」を自己の一存で處罰・杖殺している例が、小説史料ながら順地の藩鎮においても認められる。反側の藩鎮においては「河北の法、軍中にて偶語せる者は斬」（『通鑑』二四八 會昌五年正月庚申條）の如く、⁽¹⁰¹⁾

極めて嚴酷な軍律が敷かれていたから、ある意味で「將」は「兵」に對して生殺與奪の權を行使し得る立場にあったと考えられる。殊に河朔三鎮においては、

右訪問すらく、諸道の各軍は、皆な自ら都頭有るも、常に相顧望して命を效すを肯んぜずと。請ふらくは、河朔の軍法に依り、(李)彦佐・劉沔に委ねて、三三千人毎に分ちて一團と爲し、如し應急に使用すべきの處有らば、便ち一團を點して去かしめ、一切の成敗は、都頭に責成せんことを。

(李德裕『李衛公會昌一品集』一五「論彦佐劉沔諸道客軍狀」)

とある如く、あらかじめ二・三千人の兵を一團に編成し、團長たる軍將(都頭)が、一切の成敗の責任を負うというシステムがとられていたから、各團長は、それぞれ麾下の兵に對して強力な統制力を把持していたことであろう。こうした體制下においては、個々の「兵」はそれぞれ直屬の「將」の動きに没主體的に追従する他なく、「兵」全體が一個の主體的勢力集團に凝集することはむしろ困難だったと豫想される。成德における「兵」のありようは、まさしくこのような特質を示しているのではないだろうか。例えば、張孝忠が易州を以て朝廷に歸順すれば、易州の軍士は唯々これに従うのであり、牛元翼が一旦深州を以て歸順すれば、その麾下の兵は忽ち成德の本軍と死闘を交えるのである。樂壽鎮の傅良弼・博野鎮の李寶の場合も同様である。また前述のように、王廷湊に對し「大將」王位ら五人が謀叛をはかって誅された際には、その部兵二・三千人が併せて殺されているが、これなども、成德における「兵」が、あたかも個々の「將」に附隨する存在であった如き印象を與えるものである。尤も、成德においても、建中の動亂の際、滄州の士卒が、轉任に際して府庫の貨財を持ち去ろうとした刺史李固烈を殺害し、押牙程華に要請して州務を領せしめた事件のように、「兵」が主體となつた事例がない譯ではない。しかし、そうした例は、魏博に比べればごく僅かであつて、これを魏博牙軍の場合と同日に論ずる譯にはいかない。

こうしてみると、一個の主體的勢力集團として全軍一丸となつた如き魏博牙軍のありようは、餘程特殊であつたと言う

べきであろう。それを可能にしたのは、地域に根ざした兵士集團の等質性と強固な親黨意識——例えば魏州の牙軍が誅滅された際、管内六州全域で激しい抵抗が展開された——であり、さらには節帥に擁立された韓允忠・樂彥禎・羅弘信らがいずれも「魏州の人」(『舊唐書』一八二)と伝えられるように、「將」も多くまた「兵」と同じ地盤に出るという、全軍を擧げての等質性と親黨意識⁽¹⁰⁷⁾であって、かかる条件を缺く成徳においては、こうした全軍一丸となった結束力と全體性は、やはり望み得ぬものであったと思う。

以上を要すれば、魏博においては「將」「兵」一丸となった牙軍集團が文字通り藩の政治的動向を左右する主體となっていたのに對し、成徳においては「將」「兵」の間に地位の懸隔が存し、藩の軍事・政治の上で主導的位置を占めていたのは専ら「將」の側にあったと言えよう。王廷湊以降、王元逵—王紹鼎—王紹懿—王景崇—王鎔と、成徳軍における王氏世襲支配は百年に及ぶ安定の時期を迎える。その最大の因由は、まず李寶臣晩年から李惟岳—王武俊時代にかけて大規模な有力諸將の肅清と離反があり、續いて王承元移鎮に伴う一部諸將の隨行があり、最後⁽¹⁰⁸⁾に王廷湊のとき再び大規模な有力諸將の離反があって、この段階で恐らく諸將のうち最も強力な層はほぼ消滅していたからではないかと思われる。魏博において後期になるに従って藩帥の地位が不安定化し、成徳において後期になるに従って藩帥の世襲支配が安定するという對照的な現象は、魏博における主體勢力たる牙軍集團が時間とともに益々結束力を強め(年代浸く遠くして、親黨膠固たり)、成徳における主體勢力であった諸將層が數次の淘汰を経て次第に弱體化したという、兩藩の權力構造の差異を念頭に置いたとき、最もよく理解されるのではないだろうか。

III 常山の秋——王氏成徳軍支配の終焉——

王廷湊以降、王鎔に至るまで、成徳軍における王氏世襲支配は、唐末—五代の動亂をよそに、六代百年に及ぶ安定期を迎えるが、この安定の下で、成徳軍の支配機構や全體的特質もゆっくりと變容を遂げて行ったようである。

まず、制度面から言えば、軍務に應じた職掌の分化に伴う多様な職號の出現や、軍職の序列の整備があげられる。一般に唐末の藩鎮においては、職掌の分化に伴う職號の複雑化や新舊の職號の重層化といった事態が進行していたが、この點は成徳においても同様であったようである。『京畿冢墓遺文』下に收める「孟弘敏及夫人李氏墓誌」によれば、天祐十六年（梁・貞明五年、九一九）に三十歳で没した成徳軍下の軍將孟弘敏は、「東門百人將」（天祐五年）↓「□□虞候」（九年）↓「東門散將」（十年）↓「東門討擊副使・池潭都監官」（十一年）↓「東門親事兵馬使・宅内鞍轡庫□知官」（十四年）の如く昇遷しているが、軍職の位階として明らかに、百人將↓虞候↓散將↓討擊副使↓兵馬使という序列が存していたことが知られる。また同書同卷に收める「紀豐及夫人牛氏合祔墓誌」は、乾符二年（八七五）に三十八歳で没した成徳軍下の軍將紀豐の墓誌であるが、紀豐はやはり「俠馬副將」↓「散將知將事」↓「正將兼討擊副使」の如く昇遷している。「東門」「俠馬」などは部隊名乃至職責の所在を示すものであろう。鎮州府城の東門には親軍の軍營があったと見られ、また紀豐が「親事營の官舍」で没していることからすれば、「俠馬」は或は親軍の部隊名であったと思われる。また紀豐夫人の牛氏は「鎮府北馬軍營の官舍」で没しているが、これは恐らく長子の「衙前兵馬使・左親騎指揮使」爽が「北馬軍營」に所屬していたためと思われる。また【表3】No.10に掲げた如く、紀豐の曾祖奏・祖晏・父審は代々成徳藩下の軍將を務め、孟弘敏の妻李氏は「節度押衙・平山鎮遏使の女」というから、成徳における諸將層の世襲性や相互婚姻は、唐末の段階においてもなお保持されていた如くである。

次に注目しなくてはならないのは、軍職と藩政の庶務に攜わる吏職との接近の様相であろう。すなわち、孟弘敏は「東門討擊副使」などの軍職と同時に「池潭都監官」（鎮州府城北にあった池潭の管理を任務とするものであろう）「宅内鞍轡庫□監官」の如き庶務に攜わっているのであり、同墓誌によれば、弘敏の義姉の夫「衙前兵馬使」楊璋は「東門討擊副使・宅内染坊監官」の子と、義妹の夫「東鹿縣令・防禦兵馬使」李思業は「親從左廂都押衙・都迴畧商稅使」の子と記され、また弘敏の父文徳も「節度都迴畧錢穀都知官」と傳えられる。またもう一人の義妹は、「□□縣令・防禦兵馬使」の長子「鎮

府逐要」賈煒に嫁いでいるが、逐要は文職僚佐である。⁽¹¹³⁾ また、中和二年（八八二）に鎮州眞定縣で没した馬良は「後槽坊將」↓「□擊副使・兼後槽坊使」↓「右廂廩虞候」の如く昇遷しており（『隋唐五代墓誌匯編』河北卷「馬良及妻梁氏合葬墓誌」）、史主なる者は「其の先は王武俊と與に塞外より來」つた者で、高祖曾は「鎮陽の牙校」であつたが、父鈞は安平、九門の縣令を務め、圭自身も「學を好み詩に工にして、吏道に長ず」と傳えられ、唐末の光化年間（八九八〜九〇一）に阜城・饒陽二縣の尉を歴し、のち房子・寧晉・元氏・樂壽・博陵五縣の令を歴任したという（『舊五代史』九二 史圭傳）。こうした例からすると、孟弘敏一族に見られるような軍職と吏職・文職との接近・混淆は、恐らく諸將層全體に共有される傾向であり、時代の趨勢であつたと考えられる。またこれとは逆に「鎮府逐要兼山場務判官」から「山場將（加經略副使）」「山場務都知官」を経て「深州饒陽鎮退使（加衙前兵馬使）」となつた邢汴（天祐九年〔九一二〕没）のように、⁽¹¹⁴⁾ 吏職から軍職に登用される例もあつた。

五代梁初の開平四年（九一〇）、王鎔の要請に應じて鎮州の救援に赴いた李晉の宿將周德威は、成德・義武の軍を評して「鎮・定の兵は守城に長ずるも、野戰に短なり」（『舊五代史』五六 周德威傳）と言っているが、周德威の目に映つた成德の兵は守城を得手とする全く中國的な軍隊だったのであり、かつての馬軍の精強を謳われた成德軍の面目はもはや失われていた如くである。また唐末黃巢の亂以降、中國全土が戰亂の巷と化す中で、獨り鎮州のみは「王氏の無事を樂しみ、都人の士女は褒衣博帶し、奢侈に務めて嬉遊を爲す」（『新五代史』三九 王鎔傳）という戰亂の世とも思えぬ太平を謳歌していた。軍職と吏職・文職の接近・混淆という事態も、畢竟このような成德軍全體の變容に隨伴するものであつたろう。王氏百年の世襲支配下における、このような成德軍藩鎮の變容を一口で言うならば、それは王氏成德軍支配の傳統化⇨家産制的支配の安定と、これに伴う諸將層の家産官僚的性格への傾斜ということであらう。

唐末の景福二年（八九三）、鎮州の客將となつていた前盧龍節度使李匡威が、節帥王鎔を却して藩の乗っ取りを企てるといふ事件があつた。李匡威は、事前に將士に恩を施して歡心を買おうとしたが、「王氏鎮に在ること久しければ、鎮人之

を愛し、匡威に徇はず」(『通鑑』二五九 景福二年四月條)「鎮の三軍素より王氏に忠なれば、其の爲す所を惡」んだ(『舊唐書』一八〇 李匡威傳)と伝えられる。この事件は結局、屠者墨君和なる者が李匡威の手から王鎔を奪還し、匡威は誅戮されて終わったのであるが、ここに「王氏鎮に在ること久しければ、鎮人之を愛」すとか「鎮の三軍素より王氏に忠」といい、或は前掲の「王氏の無事を樂しみ」という表現を見れば、成徳における王氏の支配がすっかり傳統化し、軍民の間に自然な恭順の念を醸成するに至っていたことが見てとれよう。また、後に王鎔が野心家の客將張文禮(王德明)の策動によって弑殺されたとき、偶々晉王李存勗の軍營に參陣していた成徳の將符習は「臣、本と趙人にして家世々王氏に事ふ。…變故を聞きてより、徒だ冤憤を懷くのみ。以て自刎せんと欲するも、營魂に益無し。…願はくは霸府に在りて血戰して死すとも、身を凶首に委ぬる能はざらんことを」との決意を披瀝し、張文禮父子が誅された後、李存勗が成徳の節鉞を授けようとした所、「故使未だ葬られず、又た嗣息無きにより、臣、合に斬縗に服すべし。臣禮の畢るを候ちて命に聽はん」と述べてこれを辭している(『舊五代史』五九 符習傳)。また同じく成徳の將烏震も「主讎を復さんことを志し、雪泣して行くを請ふ。兵の恆陽に及ぶや、文禮、其の母妻泊び兒女十口を執へて之を誘ふも迴りみず、城を攻むること日に急なり」(同前 烏震傳)と伝えられる。いずれも五代亂離の世にあっては稀有な事例に屬すと言ってよからうが、これもまた成徳の將士が傳統的支配者たる王氏に強い忠順の念を抱いていたことを示す著例であろう。言うなれば、唐末五代期における成徳軍藩鎮は、累世の藩帥王氏の傳統的支配下にある一箇の小家産制王國というに近い相貌を呈していたのではないかと思われる。これを絶えず牙軍の壓力に脅かされていた同時期の魏博における藩帥權力のあり方と比べると、兩者の間には著しい差異があったと言わねばなるまい。

屈強の諸將と精強な馬軍に據って立つ(それ故に藩帥權力は必ずしも安定しない)雄藩から、傳統的支配に安座する一箇の小家産制王國へ。こうした成徳軍藩鎮の變容を、まさしく象徵しているのが王氏最後の藩帥となった王鎔その人である。王鎔は「人と爲り仁にして不武、未だ嘗て敢えて兵を先に爲さず」(『新五代史』三九 王鎔傳)と伝えられ、軍閥の領袖と

しては聊か霸氣に缺ける人物であつたらしい。前述の李匡威のクーデターのときも易々と脅迫に屈しており、五代期においては、朱梁・李晉の二大勢力の間にあって、當初は梁の正朔を奉じつつ、一面李晉との連絡を保ち、後に朱全忠が河朔併呑の志を明らかにするや、李晉と結んで唐の天祐の年號を復すなど、二強の間に反覆して、只管自藩の無事を維持するに努めた。「皆な第舍を雕靡し、園池を崇飾して奇花異木を植ゑ、遞ひに相誇尙す」(『舊五代史』五四 王鎔傳)「多く嬉遊を事とし、政事に親まず、事は皆な僚佐に仰成す」(『通鑑』二七一 貞明六年十二月條)というのが、傳えられるその内政である。また王鎔は、鎮州龍興寺の大悲像を建立したという傳承や、趙州從諗や臨濟禪への傾倒から知られるように、佛教に關しても並々ならぬ關心と理解を有していた。⁽¹¹⁵⁾ また『臨濟錄』劈頭に「府主王常侍(紹懿)、諸官と師を請じて陞座せしむ」といい、夙に柳田聖山氏が指摘される如く、「裏に向ひ外に向ひて逢着すれば便ち殺せ。佛に逢ふては佛を殺し、祖に逢ふては祖を殺し、羅漢に逢ふては羅漢を殺し、父母に逢ふては父母を殺し、親眷に逢ふては親眷を殺して、始めて解脱を得ん」(『臨濟錄』示衆)という臨濟義玄の有名な說法が、對告衆として明らかに武人層を想定したものであり、前述の李匡威のクーデターの際に王鎔の危急を救つた墨君和が、後に自宅を喜捨して臨濟寺院とした(陸游『老學菴筆記』一〇)というようなことからすると、禪への傾倒は、恐らく藩軍全體を風靡するものであったと思われる。こうした禪への傾倒は、これを「新しい實力的な統治者としてたくましい自己の權威と文化的教養を形成すべき必要にせまられていた」故と、すなわち一箇の文化的成熟と見ることも出來ようが、しかし、これを激しい戦いに明け暮れた藩祖李寶臣以來王廷湊時代までの、前期成德軍に漲る荒々しい風氣に比すならば、有閑のまにまに神妙な顔つきで禪僧の說法に耳を傾ける諸將の姿は、むしろこれを退廢と呼ぶことも可能であろう。まして世は唐極末から五代に向かう戦亂の時代なのである。成德軍が馬軍の精強を謳われた往年の面影を失つていたとしても、蓋し當然であつた。

節帥王鎔は、その晩年、道教への信仰にのめりこんで行つた。その様子は、

宴安既に久しく、左道に惑ひ、専ら長生のを求め、常に緇黃を聚めて仙丹を合練す。或は佛經を講説し、親ら符

(錄)〔錄〕を(授)〔受〕く。西山、佛寺多し。又た王母觀有り。鎔、館宇を増置し、土木を雕飾す。道士王若訥なる者、鎔を誘ひて登山臨水し、仙迹を訪求せしむ。
 (『舊五代史』五四 王鎔傳)

と傳えられる。梁・晉が河上に霸を爭う連年の死闘を繰り廣げている頃である。而して鎮州では、前述の如く「士女は褰衣博帶し、奢侈に務めて嬉遊を爲す」という浮世離れした太平の日々が現出していた。これはもはやアナクロニズムというべきものではあるまいか。藩軍を擧げての成熟の秋は、やがて嚴刻なる時流の淘汰にさらされなければならないだろう。

王鎔は晩年、行軍司馬李勣と宦者李弘規に政事を委任し、更に宦者石希蒙を寵愛して起臥を供にしたという。道教への酷信はこうした状況の中で益々昂じ、しばしば西山に詣でたが、一たび詣でれば數月歸らず、隨從の將佐士卒は萬人を下らず、爲に軍民は糧食の供給に苦しんだ。梁の貞明六年(九二二)冬、西山からの歸途、石希蒙は王鎔に更に他所への遊興を慫慂した。王鎔は李弘規の諫を容れて一旦は歸府を約したが、希蒙の懇望によって約束を撤回したため、弘規は親軍の將士を諷して拔刀して歸府を迫り、併せて希蒙を誅殺した。倉卒に歸府した王鎔は、その夜、子の節度副大使昭祚らをして李弘規・李勣らを族滅せしめ、歸府を迫った親軍の將蘇漢衡も殺された。こうして軍情不安の中、密かに野心を抱く客將王德明は、頻りに軍中を扇動したから、ついに親軍が兵變を起こし、王鎔は一族を擧げて殺害され、かくて六代百年に及ぶ王氏の成德軍世襲支配はあつけない終焉を迎えたのである。その後、叛將王德明(張文禮の舊名に復す)――張處瑾父子は、王鎔と同盟關係にあつた晉王李存勗の攻圍を受け、一年餘の抗戰の末に力盡きて降った。⁽¹¹³⁾これより成德軍藩鎮は李晉―後唐の支配下に入り、ここに成德における「河朔の舊事」も終焉を告げた。

おわりに

王鎔弑殺後、張文禮は「趙の故將を忌み、多く誅滅する所」となったといひ(『通鑑』二七一 龍德元年七月條)、また一年

餘に互る攻圍戰により、成徳の諸將層はこの動亂中に潰滅的な打撃を受けたものと思われる。⁽¹¹⁹⁾ 成徳の自立を支えて來たか
 かる諸將層の消滅により、成徳軍藩鎮は軍閥としての實質をほぼ失ったものと考えられる。後唐以降、成徳はなお河北の
 重鎮として、郭崇韜・李嗣源（後唐明宗）・范延光・杜重威といった元老クラスの軍將が出鎮する雄藩たるを失わなかつた
 が、しかし中央政府に對してはほぼ恭順であり、後晉・天福六・七年（九四一・四二）の安重榮の叛を除けば、中央に對す
 る自立拒命といった動きは殆んど全く見られないのである。

これに對し魏博においては、夙に趙翼が『廿二史劄記』二二「魏博牙兵凡兩次誅戮」で指摘するように、羅紹威による
 牙軍誅滅の後、その子周翰を追放して節度使となつた楊師厚により、軍中の驍銳を選抜して「銀槍效節軍」數千人が置か
 れ、「故時牙軍の態を復す」（『舊五代史』二二 楊師厚傳）と稱されるに至つた。その後、梁の末帝が楊師厚の死に乗じて
 魏博藩鎮の分割を圖つたことから、魏博は離反して李晉に通じ、「銀槍效節軍」は晉王李存勗の親軍に編入されて「帳前
 銀槍都」となり、對梁戰に活躍第一を稱された後、恩賞・待遇への不滿から莊宗李存勗を倒すクーデター（魏州兵變）の
 主役ともなつたが、兵變によつて即位した明宗にその驕横を惡まれ、天成二年（九二七）、九指揮三千五百人が家族萬餘人
 とともに殺されるという、再度の誅戮を被ることになったのである。これにより魏博の驕風もようやく終熄したが、『宋
 史』二五九 張瓊傳には「大名館陶の人、世々牙中軍爲り。太祖（趙匡胤）の帳下に隸す。周の顯徳中、太祖、世宗に
 從ひて南征し」とあるから、五代後期に至つても、魏博牙軍の傳統は何程か殘存していた如くである。魏博の自立の主
 體が牙軍という地域に根ざした兵士集團にあり、その傳統が在地魏州に息づいている限り、牙軍は再生され、その自立跋
 扈の風氣もまた再生されたのであろう。やはり魏博と成徳とは、その權力の構造と力學が異なっていたのである。

以上、本稿においては、魏博と成徳の差異を追究することにより、河朔三鎮が決して同一の權力構造モデルでは論じら
 れないことを明らかにした。こうした各藩の差異を包攝した上での新たな河朔三鎮の位置づけについては、なお今後の課
 題としなければならない。

註

- (1) 藩鎮體制乃至唐末五代政治史についての研究史・展望は、栗原益男「安史の亂と藩鎮體制的展開」(『岩波講座・世界歴史(六)』一九七二)、大澤正昭「唐末・五代政治史研究への一視點」(『東洋史研究』三二・四、一九七三)、清水和惠「藩鎮の研究史」(『龍谷史壇』八〇、一九八二)、伊藤宏明「唐末五代政治史に關する諸問題」(『名古屋大學文學部研究論集』八六、一九八三)など参照。
- (2) 特に堀敏一「藩鎮親衛軍の權力構造」(『東洋文化研究所紀要』二〇、一九六〇)。なお同「唐末諸叛亂の性格」(『東洋文化』七、一九五一)、「魏博・天雄軍の歴史」(一九五八→同「中國古代史の視點」汲古書院、一九九四)も参照。
- (3) 谷川道雄「河朔三鎮における節度使權力の性格」(『名古屋大學文學部研究論集』七四、一九七八)、「河朔三鎮における藩帥の承繼について」(『栗原益男先生古稀記念論集 中國の法と社會』汲古書院、一九八八)。なお同「北朝末・五代の義兄弟結合について」(『東洋史研究』三九・二、一九八〇)も参照。
- (4) 大澤前註(1)論文、同「唐末の藩鎮と中央權力」(『東洋史研究』三二・二、一九七三)、「唐末藩鎮の軍構成に關する一考察」(『史林』五八・六、一九七五)。
- (5)(6) 「反側」「順地」については、李翱『李文公集』一一「故正義大夫・贈禮部尚書韓公行狀」、李絳(蔣偕)『李相國論事集』三「又上鎮州事」など参照。
- (7) 張國剛「唐代藩鎮類型及動亂特點」(一九八三→同「唐代藩鎮研究」湖南教育出版社、一九八七)。王援朝「唐代藩鎮分類趨議」(『唐史論叢(五)』三奏出版社、一九九〇)・Denis Twitchett, "Varied Patterns of Provincial Autonomy in the 'T'ang Dynasty" in J. Perry & B. Smith (eds.), *Essays on 'T'ang Society*, E. J. Brill (Leiden), 1976. の類型論もまた同様である。
- (8) 松井秀一「盧龍藩鎮攷」(『史學雜誌』六八・一二、一九五九)。また前期盧龍藩鎮については吳光華「唐代盧龍鎮初期之政局」(『史原』一一、一九八一)、「唐代幽州地域主義的形成」(『晚唐的社會與文化』臺灣・學生書局、一九九〇)がある。なお成徳に隣接する明義藩についても、森部豊「藩鎮明義の成立過程について」(『中國史における教と國家』雄山閣、一九九四)が、その固有の事情を分析している。
- (9) 盧龍については前註(8)、魏博については前註(2)堀論文、韓國磐「關於魏博鎮影響唐末五代政權遞嬗的社會經濟分析」(一九五四→同「隋唐五代史論集」三聯書店、一九七九)、毛漢光「唐末五代政治社會之研究—魏博二百年史論—」(一九八〇→同「中國中古政治史論」臺灣・聯經出版事業公司、一九九〇)、李樹桐「論唐代魏博鎮」(『傅樂成教授紀念論文集 中國史新論』臺灣・聯經出版事業公司、一九八五)、方積六「唐及五代的魏博鎮」(『魏晉南北朝隋唐史資料』一一、一九九一)などの專論があるが、成徳についてはこれを個別に分析したものはないようである。
- (10) 堀前註(2)一九六〇論文。

- (11) 本文第Ⅱ節に引く『資治通鑑』（以下「通鑑」と略稱）二二二 廣德元年六月庚寅條、『舊唐書』一四一田承嗣傳。
- (12) この點に關する堀氏の所論は、栗原益男氏の一連の研究（『唐五代の假父子的結合の性格』、『史學雜誌』六二一六、一九五三、『唐五代の假父子的結合における姓名と年齢』、『東洋學報』三八一四、一九五六）などと密接な關連をもつ。
- (13) (14) 大澤前註(4)一九七五論文一四二～四三頁、一九七三論文四頁。
- (15) 谷川前註(3)諸論文。
- (16) 例え堀氏にも「藩帥の世襲は必ずしも成功せず、しばしば部下の軍士によって廢立され、たと世襲であっても、大部分が軍士の擁立によるか承認をえなければならなかった」（前註2）一九五八論文六九頁、「節度使の地位は兵士たちにとって、舊來の魏博の體制を維持し、『豐給厚賜』を保證するものとして必要だった」（同一九六〇論文一〇二頁）といった指摘が既にある。
- (17) 日野開三郎『支那中世の軍閥』（一九四二→同『東洋史學論集(一)』三一書房、一九八〇）五〇～五二頁、一三八頁など。なお張國剛『唐代藩鎮軍事體制』（一九九一→同『唐代政治制度研究論集』文津出版社、一九九四）の「衙軍」——「外軍」理解は、ほぼ日野氏の定義を踏襲する。
- (18) かかる「牙中軍」理解をめぐっても、日野氏が「牙中軍」の構成要素として官健と家僮・私兵を想定するのに對し、矢野主税『藩鎮親衛軍の組織と性格』（『長崎大學學藝學部人文社會學研究報告』一、一九五二）「牙中軍統制の問題」（『長崎大學學藝學部人文社會學研究報告』二、一九五二）は、「牙中軍」は専ら官健によって構成され、家僮・私兵は別個に「特別親衛隊」を構成したと述べる。
- (19) (20) 堀前註(2)一九六〇論文八六頁、八〇頁。
- (21) 谷川前註(3)一九七八論文二頁。
- (22) 藤田純子『舊唐書の成立について』（『史窗』二七、一九六九）、池田溫「正史のできるまで——唐書を例として」（『中國の歴史書』尙學圖書、一九八二）、福井重雅『舊唐書——その祖本の研究序説』（『中國正史の基礎的研究』早稻田大學出版部、一九八四）Denis Twitchett, *The Writing of Official History Under the T'ang*, Cambridge Univ. Press, 1992. など参照。
- (23) 「牙」の原義、及び「牙」「衙」兩字の通用については、封演『封氏聞見記』五「公牙」、王觀國『學林』四、「牙衙」、趙翼『陔餘叢考』二一「牙門」など参照。
- (24) 五代期になると「時兩川刺史嘗以兵爲牙軍、小郡不下五百人」（『舊五代史』六一董璋傳）の如く「牙軍」の用例も稍々一般化するようである。
- (25) 前註(23)。中唐の『封氏聞見記』には「近代通謂、府廷爲公衙。公衙卽古之公朝也。字本作牙。詩曰「祈父、予王之爪牙」。祈父、司馬、掌武備象猛獸、以爪牙爲衙。故軍前大旗、謂之牙旗、出師則有建牙・禡牙之事。軍中聽號令、必至牙旗之下、與府朝無異。近俗尙武、是以通呼公府爲公牙、府門爲牙門。字稍訛變轉而爲衙也」という。
- (26) 拙稿「唐・五代における衙前の稱について」（『東洋史論』

六、一九八八、「唐・五代の藩鎮における押衙について(上)(下)」、『社會文化史學』二八・三〇、一九九一・九三。

(27) 詳述する暇はないが、この點に關連して、史料上類見される「牙將」の語も、これを「牙軍の將」の如く解釋することは出来ない。例えば『舊唐書』二〇上 昭宗紀、天復三年正月丙午條に「青州牙將劉鄩陷全忠之兗州」というが、當時劉鄩が淄青節度使下の淄州刺史の任にあったことは『冊府元龜』三六七 將帥部・機略七などにより明らかである。また『通鑑』二四五 太和九年九月條に「鄩注代(李)聽鎮鳳翔、先遣牙將丹駿至軍中慰勞」とあるが、これは鄩注が甘露の變の直前、クーデターに必要な兵力を得るため急遽工部尚書・翰林侍講學士から鳳翔節度使に出鎮したもので、従つて出鎮前の注が派遣した「牙將」とは「牙軍の將」などではあり得ない。こうした諸種の事例を通見するに「牙將」には殆んど「麾下の將」位の意味しかないようである。

(28) 無論「軍」「兵」が單に「部隊」の意味で通用されている例も多い。しかし同時に、『周禮』以來の「軍」を部隊編成上の最上級單位とする認識もまた、通念として存していたと思われる。例えば、唐代の兵書、李筌の『太白陰經』には、一軍一二五〇〇人を最上級單位とする部隊編成規定が繰り返し見られる(部署篇第二十六、風后握奇外壘篇第六十四など)、趙葵の『長短經』九 教戰第六には、五人一長、五長一師、五師一帥、五帥一校、五校一火、五火一幢、五幢一軍とする規定が見える。

(29) 前註(11)。但し『通鑑』二六五 天祐三年正月條のみ「五

千人」とする。

(30) 『通鑑』二五〇 咸通三年七月條。但し、節帥王式が徐州の驕卒を誅滅した際には、その數「三千餘人」と記す(『冊府元龜』四〇一 將帥部・行軍法)。

(31) 『通鑑』二四二 長慶二年八月壬申條。

(32) 『通鑑』二四〇 元和十二年五月丁丑條。

(33) 『通鑑』二四三 寶曆元年七月丁卯條、杜牧『樊川文集』一一「上李司徒相公論用兵書」。

(34) 成德留後王承元が滑州に移鎮する際にも「兵二千」を從えている(『舊唐書』一六 穆宗紀・元和十五年十一月辛亥條)。

(35) 『太平廣記』一〇一 釋證三「鎮州鐵塔」(出『北夢瑣言』)に「唐天祐中、太原僧惠照因夢鎮州南三十里廢相國寺中埋鐵塔、特往訪之。…果得相國寺古基、掘其殿砌之前、得鐵塔、上刻三千人姓名、悉是見在常山將校・親軍」という。怪異譚に屬する小説史料ではあるが、成德の「親軍」も三千程であったことを示唆するか。

(36) 魏博の全兵力は、田承嗣時代十萬(前註(11)。鄉兵も含むか?)乃至五萬(『通鑑』二二五 大曆十二年十二月條)、田悅時代七萬(同二二六 建中元年二月條)、長慶年間の田布時代三萬七千(『冊府元龜』一七七 帝王部・姑息二)、後述の如く唐末羅紹威のとき「衙內親軍(牙軍)」八千に對し「衙外兵」五萬とされる。いずれにせよ、魏博において牙軍の占める比重がかなりのものであったことが知れよう。

(37) 『舊唐書』一五六 韓弘・韓充傳、『通鑑』二四二 長慶二年八月條。

(38) 前註(30)。

(39) 同文を傳える『舊五代史』二一 符道昭傳は「牙軍中軍」とするが、誤りであろう。

(40) 『舊唐書』羅威傳の「牙中軍」創建の記事も、決して中唐期の原史料に基づくものではあるまい。同傳は「自至德中、田承嗣盜據相・魏・潼・博・衛・貝等六州」というが、田承嗣の魏博就封は代宗廣德元年のことであり、魏博の領域が上記六州に確定したのは德宗の建中三年以降であるなど、魏博初期の事實について餘りにも不正確なのである。また同傳の記事は、田承嗣より樂彦禎・羅威に至る「牙(中)軍通史」となっており、むしろこの記事全體が唐末以降に成る某種の原史料に據った可能性が高い。それ故、この「牙中軍」も中唐期の用例とは認め難い。

(41) 前註(26)拙稿、及び前註(26)。

(42) 従つて、堀氏が魏博節度使田悅や史憲誠の舊職が「中軍兵馬使」「中軍都知兵馬使」であつたことから、魏博牙軍(「牙中軍」)は「中軍」とも略稱されたと説く(前註(2)一九六〇論文八〇・八一・八七頁。なお谷川前註(3)一九七八論文六頁も同様の解釋を示す)のは疑問である。「中軍」は唐初以來の「行軍」制(臨戰時の戰鬪隊形に基づく部隊編成)下において、主帥の所在する部隊を意味し(菊池英夫「節度使制確立以前における『軍』制度の展開(正)(續)」『東洋學報』四四・二・四五―一、一九六一・六二)、安史の亂後においても、建中四年(七八三)、舒王誼を總帥(諸軍行營兵馬元帥)とする淮西李希烈攻討軍において、江西節度使曹王

皐が前軍兵馬使に、山南東道節度使賈耽が中軍兵馬使に、荆南節度使張伯儀が後軍兵馬使に充てられた例(『舊唐書』一五〇(舒王誼傳)や、長慶二年(八二二)、裴度を總帥(鎮州四面行營都招討使)とする成德王廷湊攻討の軍が前軍・中軍・後軍・左軍・右軍などの編成をとっていた例(翁聘之『山右石刻叢編』七「裴度等承天題記」)がある。藩鎮下の軍職は、「行軍」の長期駐留化から軍鎮制を経て、多く「行軍」下の軍職名を繼承したが、元來臨戰時の戰鬪隊形に由來する「行軍」下の名號は、藩鎮の平時體制の職號として必ずしも適合的ではなく、多分に名目と實際の間に乖離を生ずることになった。「中軍兵馬使」等の名稱も然りであつて、藩鎮の平時體制に必ずしも「中軍」なる部隊が實在した譯ではなく、多分に名目的な稱號と化していたと考えられる。例えば「中軍兵馬使・兼西山中北路兵馬使」・「使持節都督茂州諸軍事行刺史・李公誠」(『八瓊室金石補正』六八「諸葛武侯祠堂碑陰記」元和四年)とある西川節度使下の軍將李公誠の責任は、會府成都を離れた行茂州刺史及び西山中北路兵馬使にあり(「西山」とは『通鑑』二三四 貞元九年五月條の胡注に「自彭州導江縣西出靈崖關、歷維・茂、至當・悉諸州、皆西山也」というそれであろう)、「以(高)思繼兄爲先鋒都將・嫺州刺史、思繼爲中軍都將・順州刺史、思繼弟爲後軍都將」(『舊五代史』一二三 高行周傳)は、唐末乾寧年間(八九四・九八)における盧龍藩の例であるが、この場合も高思繼の責任は順州刺史であつたと考えられるから、「中軍兵馬使」「中軍都將」はいずれも藩軍内における地位・位階を示

す名目的肩書きに過ぎなかったであろう。

- (43) 「六院」は恐らく藩府使院の諸舎を指すのであろう。『舊唐書』一四〇章阜傳にも「(劉)闢曰『臣不敢反、五院子弟爲惡、臣不能制』と「五院子弟」の語が見える。

- (44) これらの部隊については日野開三郎『五代の廳直軍について』(一九三九)同『東洋史學論集』(二)三一書房、一九八〇参照。

- (45) 『通鑑』二三二貞元三年正月條、同二四九大中十二年十月條、同二五二咸通十一年正月條。

- (46) 菊池英夫『五代禁軍における侍衛親軍司の成立』(『史淵』七〇、一九五六)。

- (47) 廳子都については、堀敏一「朱全忠の廳子都」(『和田博士古稀記念東洋史論叢』講談社、一九六一)参照。

- (48) なお、武寧の銀刀等七軍が「三百人を以て自衛」或は「衙城に番宿」したとい(前註(30))、元和初年に昭義節度使盧從史は「日に三百人の膳を具へて以て牙兵に餉」した(『新唐書』一四三郝士美傳)とあることからすれば、武寧や昭義のような強藩でも、府衙の當直に當たる兵は三百人程度が標準であったようである。魏博では、牙軍の規模の大きさに比例して當直に當たる兵も千人と多かった譯で、それだけ藩帥に與える壓力感も増したことであらう。

- (49) 長慶年間、節帥田布が成德攻討に出兵した際に「布發六州租賦以供軍、將士不悅曰『故事、軍出境、皆給朝廷。今尙書刮六州肌肉以奉軍。雖尙書瘠己肥國、六州之人何罪乎』」

『通鑑』二四二長慶二年正月條とあり、羅紹威が牙軍

を誅滅した際には「六州之内、皆爲讎敵」(『舊唐書』一八一羅威傳)の如く、管内六州で激しい抵抗が展開された。魏博六州という地域と牙軍の強い紐帶意識、一體性が覗われるよう。

- (50) 『舊唐書』一二一僕固懷恩傳、『新唐書』二二五上史思明傳、『通鑑』二二二廣德元年正月條。これらによれば田承嗣の最後の肩書は雋陽節度使であり、承嗣が史朝義のとき魏州刺史であったとする所傳(『舊唐書』一四一田承嗣傳)には従い難い。

- (51) 『新唐書』二一〇田承嗣傳、『文苑英華』九一五裴抗「魏博節度使田公神道碑」。なお『舊唐書』二〇〇上史思明傳末の投降者を列記した條には「鄭州田承嗣」とあり、同一四一田承嗣傳は、承嗣が鄭州刺史に補せられたと記すが、莫州はしばしば鄭州に作られるので、鄭州は恐らく鄭州の誤記であらう。

- (52) 『舊唐書』一一代宗紀・廣德元年閏正月戊申條。この後、所領にはしばしば出入りがあり、建中三年(七八二)以降、魏・博・貝・澶・相・衛六州に固定する。

- (53) 『文苑英華』八〇六程浩「相州公宴堂記」。なお原文は「滿」を「蒲」に作るが、『全唐文』四四三により改めた。

- (54) 『通鑑』二二九至德二載二月條、同二二〇、同載十二月條。但し『舊唐書』一四二李寶臣傳では、張忠志は安慶緒が相州に圍まれた際(乾元元々二年)一旦朝廷に歸順し、恆州刺史を授けられたとする。

- (55) 『舊唐書』一四二李寶臣傳。

- (56) 『通鑑』二二二 寶應元年十一月丁丑條。『舊唐書』一二一 僕固懷恩傳は張忠志投降時の所領を深・恆・定・易四州とするが疑問のようである(『通鑑』同條「考異」)。
- (57) 『舊唐書』一四三 程日華傳。但し『隋唐五代墓誌匯編』(天津古籍出版社、一九九一) 北京大學卷Ⅱ「程公殘志」によれば、程元皓は寶應元年十二月に没している。
- (58) 『舊唐書』二〇〇上・『新唐書』二二五 史思明傳(舊傳は盧淑に作る)。
- (59) 『通鑑』二二〇 至德二載十二月條、『新唐書』二二五 史思明傳。
- (60) 『京畿冢墓遺文』中「曹閭國墓誌」大曆十一年(七七六)。
- (61) 『舊唐書』一四二・『新唐書』二二一 王廷湊傳。
- (62) 『新唐書』一四八 康日知傳。
- (63) 『新唐書』一九八 谷那律傳は谷從政を太宗朝の儒者谷那律の孫とするが、假託ではあるまいか。同傳は那律の子(從政の父) 崇義を「天寶末爲幽州大將」と記すが、『舊唐書』一八九上 谷那律傳によると、那律は永徽(六五〇～五六)の初に没しており、天寶末と隔たること百年になる。谷從政は李寶臣の子惟岳の舅とされるが(『舊唐書』一四二 李惟岳傳など)、一方、張孝忠は寶臣の妻の妹の昧谷氏を娶ったとされる(『舊唐書』一四一・『新唐書』一四八 張孝忠傳)。谷從政の本姓は昧谷氏だったのではないか。
- (64) 安・康・曹などは代表的胡姓である。章羣『唐代蕃將研究』(聯經出版公司、一九八六)も参照。
- (65) この點に關連して、安史の亂以降、河北は「胡化」したという陳寅恪の有名な説がある(『唐代政治史述論稿』一九四四↓「再版」三聯書店、一九五六など)。しかし、例えば幕職官には漢人知識人層が多く登用されていることは明らかであり、方積六「唐代河朔三鎮《胡化》說辨析」(『紀念陳寅恪教授國際學術討論會文集』中山大學出版社、一九八九)が批判するように、陳説は流石に武斷に過ぎるようである。
- (66) 魏博においても、田承嗣が「安史の餘黨を收め」たとい(『通鑑』二二三 永泰元年七月壬辰條)、田悅時代に戰死した安墨嘏(『舊唐書』一三四 馬燧傳・奚の出身という史憲誠の祖・父(同一八一・『新唐書』二二〇 史憲誠傳)など、塞外民族出身の武將も散見されるが、成徳の比ではあるまい。
- (67) 安史の亂中、反亂軍が河北で募兵を行ったことは『通鑑』二一九 至德二載二月條、同二二〇 同載十月條。
- (68) 谷川道雄『安史の亂』の性格について(『名古屋大學文學部研究論集』八、一九五四)。
- (69) 羅振玉『山右冢墓遺文』下「田意眞墓誌」元和十二年(八一七)。
- (70) 『舊唐書』一四二 李寶臣傳(『通鑑』二二五は、大曆十一年末に掲げる)。
- (71) 『通鑑』二一九 至德元載十月條に「郡置防兵三千、難以胡兵鎮之」という。反亂軍側では、最頼の精銳たる「胡兵」を他の兵の間にコルセット式に配備するような方策がとられたようである。
- (72) 『舊唐書』一四一 張孝忠傳、同一四二 李惟岳・王武俊

傳。

(73) 『新唐書』二二一 王承宗傳。

(74) 前掲の「李寶臣碑」には、張忠志が安慶緒によって常山太守に任じられた至德二載(七五七)を「公の恆に牧たるの元年」とする紀年が用いられている。

(75) 『舊唐書』一四二 李寶臣傳。これに對して盧龍・魏博では、安史或は安史父子を「二聖」「四聖」として祀ることが行われていたという(『新唐書』一二七 張弘靖傳、『通鑑』二二四 大曆八年九月條)。

(76) 『冊府元龜』一四〇 帝王部・旌表四、『新唐書』二一一 王承宗傳。

(77) 『舊唐書』一四三 李全略傳は、王承宗没後に軍情不安により自拔歸朝したという。

(78) 『舊唐書』一四二・『新唐書』一四八 王承元傳。

(79) 兩唐書は王廷湊とするが、『通鑑』や詔敕類(『唐大詔令集』一一八・一二〇)、唐人の文集(『元氏長慶集』四一『白氏長慶集』五一・六〇など)は多く王庭湊に作る。『冊府元龜』將帥部は兩様に作り(四〇六・四三六/四四八)、判然としない。

(80) 恆州は元和十五年、穆宗の諱を避けて鎮州と改稱した(『舊唐書』一六)。

(81) 『舊唐書』一四二 王廷湊傳では部兵二千餘人と併せて誅されたといい、『新唐書』二二一 同傳・『通鑑』二四二 長慶元年八月條は三千餘人とする。

(82) 『新唐書』一四八 牛元翼・傅良弼傳、『通鑑』二四二

長慶二年三月條。

(83) 前註(63)。

(84) 羅振玉『襄陽冢墓遺文』「楊孝直墓誌」大和九年(八三五)。

(85) 『隋唐五代墓誌匯編』河北卷「李君妻王氏墓誌」元和十二年(八一七)。

(86) (87) 例えば周紹良編『唐代墓誌彙編』(上海古籍出版社、一九九二)からは、それぞれ十數例を数えることが出来る。一例をあげれば、咸通三年(八六二)に没した謝鐔は、滑州

討擊使→宣州同前職→楚州衙前兵馬使→定州衙前兵馬使→荆南同節度副使・專知將務の如く轉遷しており、長男宗師は前河東節度驅使官と傳えられる(咸通〇二二)。この點、順地の藩鎮の軍將は、むしろ辟召に應じて諸藩の間を轉々とする文職僚佐と相似た一面をもっていた如くである。

(88) 本稿では一切言及出来なかったが、安史の根據地を繼承した盧龍藩鎮の状況も(魏博ではなく)成德に近かったと思われる。というより、盧龍における激しい下剋上の藩帥交替の頻發は、盧龍における諸將層の勢力が成德以上に強かったことを示唆する。

(89) この他、有力部將に藩帥と同姓を與える賜姓政策も行われたようである。李寶臣晩年に肅清された深州刺史張獻誠(『通鑑』二二六 建中二年正月條)は、「李寶臣碑碑陰」や『舊唐書』一四一 張孝忠傳では「李獻誠」とするが、これは李寶臣が、最晩年の大曆十三年(七七八)に一旦張姓に復し、翌年再び李姓に復歸した(『舊唐書』一一二)のに應じて、獻

誠にも改姓が行われた痕跡を示すものではあるまいか。王士眞のとき入朝した成徳の將趙萬敵は、かつて王武俊より善戰を嘉されて王姓を賜わっている（『冊府元龜』一二〇 帝王部・選將二）。

- (90) 『舊唐書』一八下 宣宗紀・大中十一年三月條、「唐成徳軍節度使王元逵墓清理簡報」（『考古與文物』一九八三一一）、高彥休『關史』下『盧相國指揮鎮州事』。

- (91) 『唐代墓誌彙編』咸通〇七〇『唐故□州防禦使……李府君夫人太原王氏墓誌銘并序』。

- (92) 王寶時『論唐朝藩鎮軍隊的三級構成』（『人文雜誌（西安）』一九八六—四）。

- (93) 谷川前註（3）一九八八論文。

- (94) 例えば、會昌三年（八四三）に昭義留後劉稭が自立拒命した際も「三軍旄鉞を降さんことを請ふ」（『舊唐書』一七四李德裕傳）というが、實際は劉氏の側近勢力が前帥劉從諫の喪を秘して節鉞を強請したものである（『通鑑』二四七 會昌三年四月條）。

- (95) 朝廷の選任によらずして節鉞を授けることの例は、安史の亂中の乾元元年（七五八）、平盧節度使王玄志が没した際、中使を派遣して「就きて軍中の立てんとする所の者を察して授くるに旌節を以てせし」めた（『通鑑』二二〇 乾元元年二月條）のに始まり、肅・代宗朝には、山南東道節度使來瑱が「將吏・州牧・縣宰を諷して上表して之を留めんことを請はしめ」て入朝を拒否したり（『舊唐書』一一四 來瑱傳）、荊南節度使衛伯玉が「潛かに將吏を諷して詔を受けず」丁憂

による致仕を免除されたり（同一一五 衛伯玉傳）といった如く、軍中將吏の請と稱して朝命を曲げることが公然とまかり通っていた。續く德宗も「節制を命ずる毎に、必ず本軍より其の歸する所と爲る者を採訪せしむ」（同一二二 盧從史傳）という姑息策をとったため、自立諸藩においては、こうした稱請が半ば慣例化したのではないかと思われる。

- (96) この銷兵（年8%の兵員削減）の密詔が元和十五年冬に出されたことは、礪波護「中世貴族制の崩壊と辟召制」（一九六二）同『唐代政治社會史研究』同朋舍、一九八六）註（3）参照。また楊西雲「長慶銷兵平議」（『社會科學戰線』一九八五—三）も参照。

- (97) 武寧の銀刀都が「父子相承」したという（王謙『唐語林』二 政事下）他、『通鑑』二二一 貞元元年五月條に、河中節度使李懷光の叛を邠寧節度使韓游瓌の軍が攻討した際に「士卒指邠軍曰『彼非吾父兄、則吾子弟（胡註：朔方軍分屯河中・邠州、故云然。……）。奈何以自刃相向乎』」とあり、『李衛公會昌一品集』一五「論石雄請添兵狀」に、澤潞攻討戰に際して「訪聞、奏事軍將張宏慶云『陳許・徐泗兵、初到行營、軍外子弟有一萬人以上、緣未有戰陳、聞不得已稍卻歸本道。今猶有少壯堪充戰卒五六千人、皆是父子兄弟、人心齊一、臨時使用、絕勝諸軍』」という。

- (98) 十將については、拙稿「唐藩鎮十將攷」（『東方學』八七、一九九四）参照。

- (99) 元和七年（八一二）六十五歳で恆州石邑縣に没した孫岩なる者は、その墓誌に「雲麾將軍・試太常卿」と散・試官が傳

えられるのみで藩の軍職に關する記載はなく、祖庭も「折衝都尉」父璋も「蜀府中郎將」と記されるのみで軍職の記載なく、五子もまた官職の記載がない（『隋唐五代墓誌匯編』河北卷「孫岩墓誌」）。これは、孫氏が諸將層に屬するのではなく、代々兵士（官健）であったことを示唆するようである。

- (100) 『舊唐書』一四六 李說傳に「（河東監軍王）定遠署虞候田宏爲列將、以代彭令茵。令茵不伏、揚言曰「超補列將、非功不可、宏有何功、敢代予任」。定遠聞而含怒、召令茵斬之、……」という。

- (101) 段成式『酉陽雜俎』前集八 黥に「蜀將尹偃營有卒、晚點後數刻。偃將責之、卒被酒自理聲高。偃怒、杖數十、幾至死。卒弟爲營典、性友愛、不平偃。：偃陰知、乃以他事杖殺典。また李光弼は「每校旗之日、軍士小不如令、必斬之以徇」（『舊唐書』一五二 郝廷玉傳）といい、『通鑑』二二四 大曆三年二月甲午條に「郭子儀禁無故軍中走馬。南陽夫人乳母之子犯禁〔胡注：子儀妻封南陽夫人〕、都虞候杖殺之」という。

- (102) 李氏支配下の平盧、吳氏支配下の淮西藩においても同様の記載がある（『冊府元龜』四四八 將帥部・殘酷、『舊唐書』一二四 李師道傳、同一七〇 裴度傳）。

- (103) 前註(81)參照。

- (104) 『舊唐書』一四一 張孝忠傳、同一四三 程日華傳。

- (105) 宣宗朝の節帥王紹鼎は暴虐であつたため「衆、之を逐はんと欲」したが（『通鑑』二四九 大中十一年八月條）、偶々紹

鼎が病死したため變事には至らなかつたという。但し『太平廣記』二二七 ト筮二「五明道士」（出「耳目記」）には「長子紹懿立二年、荒淫暴亂、衆議廢而殺之、立其弟紹鼎」という。

- (106) 前註(49)。

- (107) 『舊唐書』一四一 田布傳に、長慶年間、對成德戰に出兵した魏博節度使田布に對して「而將卒益偃、咸曰「尙書能行河朔舊事、則死生以之。若使復戰、皆不能也」とあり、ここでは「將」「兵(卒)」は全く利害を一にする如くである。

- (108) 例えば、深・冀二州刺史を務めた軍將楊孝直が王承元に隨行している（前註(84)「楊孝直墓誌」）。なお同誌によれば、楊孝直は後に、深州を脱出して山南東道節度使に赴任する途次の牛元翼と滑州で再會し、舊知との奇遇を喜んだ元翼により山南東道に辟されている。成德において、諸將層が相互に親密な關係を持していた一例であろう。また軍將劉逸なる者も王承元に從つて成德から義成↓鳳翔↓平盧と隨從している（羅振玉『山左家墓遺文』「劉逸墓誌」）。

- (109) この點については、前註(26)一九九・一九三拙稿を參照。

- (110) 後述の李匡威のクーデターで、匡威が王鎔を劫して鎮州府城に入城しようとした際のこととして『通鑑』二五九 景福二年四月條に「匡威入東偏門、鎔之親軍閉之」といい、『北夢瑣言』一三も「乃入自子城東門、門內有鎔親騎營中之卒」という。

- (111) 『通鑑』二七一 龍德元年二月條の胡注に「潭城、常山牙城北偏也。：北潭、常山宮後之池也。州之勝游惟此。以有池

潭、故其城謂之潭城」とある。

- (112) 「回圖」は商品貿易・交易・利貨などによる營利經營を指す當時の常用語である。さし当たり日野開三郎「五代吳越國の對中原貿易と海上貿易」(同『東洋史學論集』(一〇)『三一書房、一九八四)一六三頁以下參照。

- (113) 『新唐書』四九下 百官志に、節度使下に逐要一人が置かれることが見える。職掌は不詳であるが、『京畿冢墓遺文』下「邢通及夫人龐氏合祔誌」中和三年(八八三)に、墓主邢通の父羨は「鎮府の駁要を授けられ、六司を糾轄し、咸く軌則を規す」という。この「駁要」は逐要と同じものであろう。なお嚴耕望『唐代方鎮使府僚佐考』(一九六六)同『唐史研究叢稿』香港・新亞研究所、一九六九)參照。

- (114) 『隋唐五代墓誌匯編』河北卷「邢汴夫人周氏合葬墓誌」。

同誌では邢汴の祖父儀は攝冀州棗強縣令と傳える(曾祖佚・父諒は不仕)。ところで前註(113)邢通墓誌には通の仲子忠汴を「北山場採斫務判官」、季子忠收を「左奉勝押官」七城稅務公事」という。父・祖の名が全く一致しないが、或は邢汴はこの邢忠汴(一時臣屬した朱全忠の諱を避けて改名か?)と同一人である可能性もある(邢通は趙□の人、邢汴は趙□鎮陽の人、望はいずれも河間とする)。いずれにせよ、恐らく在地趙州の出身で、吏職に登用されて成德軍の支配機構の末端に食いこんで行った階層ではないかと思われる。こうした在地層の進出の例としては、他に『常山貞石志』一〇「封崇寺陀羅尼經幢」光啓二年(八八六)に見える鎮州行唐縣の五氏がある。同碑には「經略副使・鎮遏都將」五公義をはじめ

め、「差科」五叔諒・五公順、「司功」五神祐、「司兵」五惟□、「司戸」五忠□などが見え、「延壽坊」下には五□□・五公□・五貞簡の名が見えている。

- (115) 唐末成德軍下の佛教、及び王鎔の宗教への傾倒については、柳田聖山「唐末五代の河北地方に於ける禪宗興起の歴史的社會的事情について」(『日本佛教學會年報』二五、一九五九)、金井德幸「唐末五代鎮州(正定)に於ける臨濟禪——鎮將王鎔並びに五臺山文殊信仰との關連を中心に」(『立正史學』三七、一九七三)、西尾賢隆「唐代後半期における成德藩鎮下の佛教」(『古代文化』三三・一〇、一九八一)など參照。

- (116) (117) 柳田前註(115)論文一八一～八二頁、一七九頁。

- (118) 『通鑑』二七一 貞明六年二月・龍德二年九月條、『舊五代史』五四 王鎔傳。

- (119) 叛將張文禮父子の下で鎮州の將士が激しい抗戰に従った理由として『通鑑』二七一 龍德二年九月戊寅條の胡注は「鎮人負弑君之罪、知破城之日必駢首而就戮、故盡死一力以抗晉。晉以常勝之兵而臨必死之衆、雖兵精將勇、至於喪身而不能克」と述べる。鎮州の將士がなす王氏に心を寄せていたことは『舊五代史』五四 王鎔傳が傳える鎔の次子昭誨のエピソード「當鎔被禍之夕、昭誨爲軍人攜出府第、置之穴十餘日、乃髡其髮、被以僧衣。屬湖南綱官李震南還、軍士以昭誨託於震。……」から覗われる。

WEIBO 魏博 AND CHENGDE 成德
—A Re-examination on the Structure of Power
in the Hexue Sanzhen 河朔三鎮—

WATANABE Takashi

In the late Tang the three provinces in Hebei 河北 of Weibo 魏博, Chengde 成德 and Lulong 盧龍, collectively called the Hexue Sanzhen 河朔三鎮, were notorious for their disobedience of the central court and for their enjoyment of a considerable degree of independence. On this basis, it has been assumed that the structure of power in these three provinces was approximately the same. That is, that there was a powerful group of soldiers called Yajun 牙軍 in each province and that these groups frequently deposed or murdered their provincial commander (fanshuai 藩帥) in order to preserve their interests, and that as a consequence of this the authority of the provincial commander was unstable. This model, however, is constructed largely on evidence pertaining to the situation in Weibo, and the assumption that it can also be applied to the other two provinces lacks supporting evidence.

In this essay, I attempt to show that the three provinces of the Hexue Sanzhen by no means had a similar structure of power. This is shown via a contrasting study of Chengde and Weibo. The main points presented are as follows:

(i) The title of Yajun should be considered to refer to the proper name of the guard-corps headquartered at Weibo. This guard-corps was distinct from those in the other provinces in that it had a considerable number of soldiers who were recruited from the home province, and in that its posts were based on hereditary succession and intimately linked by close bonds of fellowship and common interest.

(ii) No such powerful group of soldiers as that of the Yajun in Weibo existed in Chengde, and those men who occupied the central positions of military-political power there were experienced general officers from the An-Shi 安史 rebel army. It is, therefore, proper that the structure of power

in Chengde be examined through analyses of the relations and conflicts existing between the provincial commander and these officers.

(iii) The reason for the stability of Chengde under the control of the Wang family 王氏 as provincial commanders was the emasculation of the powerful general officers during the course of several struggles between the provincial commanders and these officers, and the purge or appeasement attempts on the officers by the commanders extending over a long period of time. In the unsettled era after the Huang Chao 黃巢 rebellion, however, the stability and peace of Chengde as a small kingdom of the Wang family no longer pertained.

**A NOTE ON THE LAND AND PEOPLE OF TOU-XIA 投下
IN SOUTHERN CHINA DURING THE YUAN PERIOD**
—Conflict between Government Magistrates and
Tou-xia Officials as recorded in the
Institutions of the Yuan Dynasty 元典章—

UEMATSU Tadashi

During the Yuan period, a certain number of households of southern China were awarded to imperial relatives, nobles, and meritorious persons. In this system such designated households had to remit the paper currency tax 戶鈔 to support the Tou-xia overlords. In this paper I clarify the circumstances surrounding the land and people of Tou-xia via an investigation of the documents of the *Institutions of the Yuan Dynasty*.

First, I examine the legal case of the Command Office of Households 戶計長官司 of Yuan-zhou-lu 袁州路 in Jiang-xi 江西 province. Next, I examine cases of the Grand Wealth Supervisory Bureau 財賦都總官司 and the Wealth Control Bureau 財賦提舉司 in Jiang-zhe 江浙 province. Finally, I examine a series of fourteen cases collected in the section on the department of Personnel Administration 戶部 of the *Institutions of the Yuan Dynasty*. The aim of this examination is to investigate the structure and contents of each document, to consider the historical background, and